ISSN 1344-2163

印西の歴史

第14号　令和５年3月

特集「印西地域の原始・古代」

印西市東海道遺跡出土の超大型ナイフ形石器について
　―資料の紹介とその意義―　橋本　勝雄……　1

印旛沼北岸における中期末葉の弥生土器
　―向辺田式の設定―　髙花　宏行……　22

【講演録】
令和４年度市史編さん講演会
瓦塔から探る古代・印旛郡の仏教文化　池田　敏宏……37

刊行物のご案内　58

印西市東海道遺跡出土のナイフ形石器

【論考】

印西市東海道遺跡出土の超大型ナイフ形石器について

―資料の紹介とその意義―

橋本勝雄

はじめに

東海道遺跡は、印西市の南西部、印西市松崎東海道に所在し、八千代市との市境を流れる神崎川と新川の合流点に近い標高約二五メートルの台地上に立地している。

発掘調査は市道の整備に伴い、まず、平成九年十月から平成十年二月に財団法人（現・公益財団法人）千葉県教育振興財団によって行われ、その後、第二地点の発掘調査が、公益財団法人印旛郡市文化財センターによって、令和元年八月から令和二年二月（第一次調査）、令和二年十一月から令和三年三月（第二次調査）まで断続的に実施された（黒沢二〇一四、印旛郡市文化財センター二〇二一ａ・ｂ、二〇二二）。その結果、旧石器時代、縄文時代、古墳時代～奈良・平安時代、及び中世の遺構・遺物が検出されている。

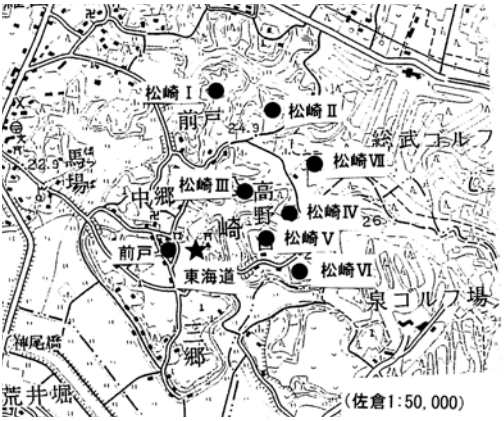
このうち今回の検討対象とする旧石器時代の資料は、第二地点の第二次調査の際に発見された、長大にしてかつ優美な形態のナイフ形石器である。後述するように、当該資料はナイフ形石器の白眉といえ全国的にも希少価値が高い。

本稿では、かかる重要性に鑑み、報告書の刊行に先立ち資料化を試み、併せて、その歴史的な意義にも言及したい。

なお、執筆に際しては、印西市教育委員会から特段のご配慮により公表のご許可を賜りました。謹んで御礼申し上げます。

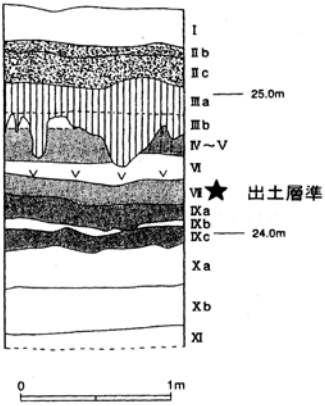
一　超大型のナイフ形石器（第1～第3図）

当該資料は立川ロームⅦ層から単独で出土した。Ⅶ層の年代については、工藤雄一郎によれば、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）で約三万三〇〇〇年～三万一〇〇〇年前（工



第１図

東海道遺跡と周辺の遺跡分布図



第２図

付近の基本土層と出土層準（松崎Ⅳ遺跡）

藤二〇一〇・二〇一二・二〇二一）と推定されている。**大きさ**は一六センチメートルを超え、**形態**は、全体の形状はやや狭長な柳葉形を呈する。基部には平坦な打面の一部が残されている。側面は先端に向かってやや湾曲しているがその度合いは低く直線的である。刃部の角度は約四〇度となっているのに対して二次加工面の剥離角は急角度（七〇～八〇度）である。**素材**は超大型の石刃であり、その大きさは、整形加工の在り方から、長さ一七センチメートル以上、幅四センチメートル前後、厚さ一センチメートル前後と推定される。表裏の剥離面の打撃方向から素材は両設打面を有する石核から剥離されたものと推察される。**調整技術**は二側縁加工となっており、その整形剥離には、ナイフ形石器の重要な技術要素のひとつである対向調整剥離も部分的にみられる（佐藤二〇二一）。対向調整剥離は、素材の表裏の両方向から急角度な剥離を行うナイフ形石器に特有の二次加工技術であり、この調整剥離により素材（石刃）の最も厚みのある中央部分が折断されている。[1]

整形剥離には多段階表面変化がみとめられるが、左側縁の基部付近には素材石刃と同様の風化度を呈する整形剥離痕（第８図１・図中傍点）が残存している。むろんこの痕跡は部分的であり、これ以外の大半がその後の加工痕跡であることから、これをもって当初の形態を即断することは

第３図　印西市東海道遺跡出土のナイフ形石器

できないが、このことと後述の超大型例（一五センチメートル超）の大半が基部加工であることを加味すれば、当初の姿も同様であった可能性が高い。[2]

すなわち東海道例は、関東への搬入時には大型石刃ではなく、基部加工のナイフ形石器であったが、追加の整形剥離によって関東風にアレンジされた稀な例と考えられるのである。

使用痕については、肉眼的には確認されない。左側縁の刃部に部分的に刃こぼれがみられるが、これは使用によるものではなく、ジョレンによる調査時の損傷（俗称「ガジリ」）である。このほか器面全体に正体不明の黒色付着物がみられる。

石材は、東北頁岩（東北産珪質頁岩）である。東北頁岩製のナイフ形石器は、関東東部で数多く発見されている。特に下総台地で顕著であり、例示したように、類例は東海道遺跡に隣接する松崎地区内陸工業用地内遺跡群（松崎Ⅳ遺跡）をはじめ県内各所でみとめられる（第5図2c、4a・b、5）。

二　超大型の関連資料（第4～第6・第9図、第1表）

東海道遺跡とほぼ同時期の資料は、太平洋側では、東京都板橋区菅原神社台地上遺跡（比田井ほか一九九七：第6図16）を西限として、古利根川（現・荒川筋）以東に分布している（第9図）。[3]

しかしながら、第1表に掲げたように東海道遺跡を凌駕するような超大型例は、関東には無く、かつ東北頁岩が産出する地域（東北・北陸北部）でも十指に満たない。ちなみに、東北・北陸方面の類例は、北から岩手県峠山牧場Ⅰ遺跡A地区第五文化層（高橋・菊池一九九九）・大渡Ⅱ遺跡第一文化層（中川一九九五）、秋田県松木高館平遺跡（宇田川二〇〇一）・米ケ森遺跡（富樫ほか一九七七）、山形県南野遺跡（長沢一九七七）・高倉山遺跡（鹿又ほか二〇一六）・東山遺跡（加藤・佐々木一九七八）・新潟県樽口遺跡A―KH文化層（立木ほか一九九六）・上ノ平遺跡A地点（沢田ほか一九九四）が挙げられるが、このうち高倉山例は東海道例よりもやや小型であり、仮に、これを除外すると都合八例ということになる。

これらの超大型例については、石刃素材であることは共通しているが、基部加工のものが大半であり、東海道例のに類似した二側縁加工のものは上ノ平例が唯一である。ただし、上ノ平例にしても別系統の杉久保系とされており、東海道例と同一視できない。このように東海道のナイフ形石器は東北・北陸方面では類をみないのである。

（1）千葉県の大型ナイフ形石器

No.	遺跡名	所在地	出土状態	下総編年（立川ローム）	大きさ (cm-g) 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	素材	整形加工	文献
1	東海道	千葉県印西市	Ⅶ層（単独出土）	Ⅱa期中段階（Ⅶ層）	16.36	3.28	1	56.96	東北頁岩	石刃	二側縁	印旛郡市文化財センター 21、22
2	滝東台（たきひがしだい）	千葉県東金市	集中地点A採集Ⅶ層	Ⅱa期中段階（Ⅶ層）	14.4	2.5	1	38.6	東北頁岩	石刃	基部	椎名 95
3	滝東台（たきひがしだい）	千葉県東金市	集中地点B Ⅶ層	Ⅱa期中段階（Ⅶ層）	12	3.2	1.1	39.5	東北頁岩	石刃	二側縁	
4	千田台（ちだだい）	千葉県香取郡多古町	第3ブロック	Ⅱa期新段階（Ⅵ層下部）	13	3.3	1.6	34.7	東北頁岩	石刃	基部・先端	矢本・渡辺 96

（2）東北・北陸方面の事例（長さ 16.0cm 超）

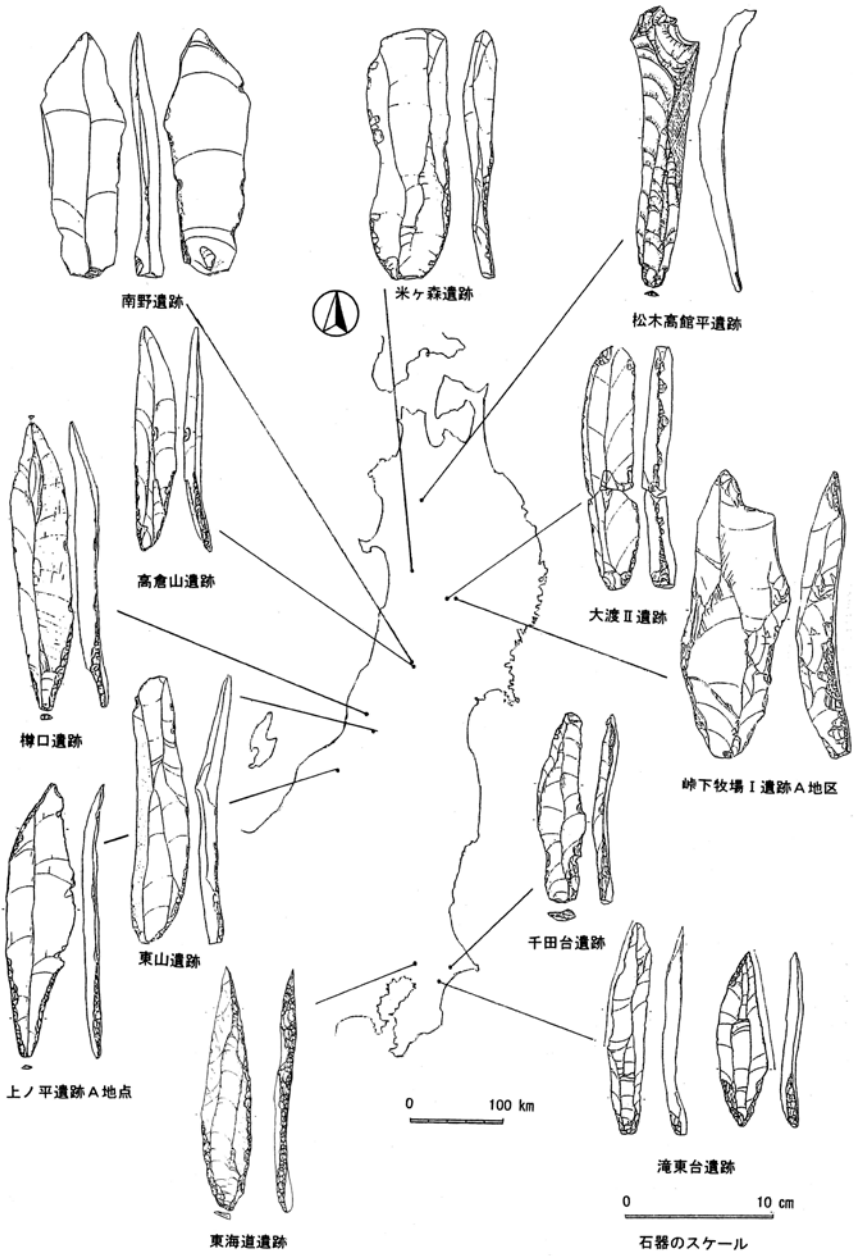
No.	遺跡名	所在地	出土状態	下総編年（立川ローム）	大きさ (cm-g) 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	素材	整形加工	文献
1	峠山牧場Ⅰ遺跡 A地区第5文化層	岩手県和賀郡西和賀町	ブロック18	Ⅱc期（Ⅳ層上部）	19.6	7.2	3.7	354	東北頁岩	石刃	基部・先端	高橋・菊池 99、村木 18
2	大渡Ⅱ（おおわたり）第Ⅰ文化層	岩手県和賀郡西和賀町	第2遺物集中区	Ⅱa期新・中段階（Ⅵ・Ⅶ層）	16.4	3.7	1.61	88.99	東北頁岩	石刃	基部	中川ほか 95、渋谷・石川 10
3	松木高館平（まつきたかだてたいら）	秋田県大館市	採集	Ⅱc期？（Ⅳ層上部？）	19.2	4.7	1.6	94.4	東北頁岩	石刃	基部	宇田川 01
4	米ケ森（よねがもり）	秋田県大仙市	遺物集中	Ⅱc期（Ⅳ層上部）	16.9	5.4	—	—	東北頁岩	石刃	基部	富樫ほか 77、渋谷・石川 10
5	南野（みなみの）	山形県新庄市	遺物集中	Ⅱc期（Ⅳ層上部）	16.8	5.5	1.9	—	東北頁岩	石刃	基部	長沢 77、渋谷・石川 10
6	高倉山	山形県最上郡舟形町	遺物集中	不明	16.1	2.8	1.2	45.82	東北頁岩	石刃	基部	鹿又ほか 16
7	東山	山形県西置賜郡小国町	採集	不明	18	—	—	—	東北頁岩	石刃	基部	加藤・佐々木 78
8	樽口 A-KH 文化層	新潟県村上市	遺物集中	Ⅱa期中段階（Ⅶ層上部）	19.6	3.8	1.7	107.93	東北頁岩	石刃	基部	立木ほか 96、沢田 18、中村・佐藤 10
9	上ノ平遺跡A地点（うえのたいら）	新潟県東蒲原郡阿賀町	ブロック外	Ⅱc期？（Ⅳ層上部？）	18.7	4.6	0.91	61.0	東北頁岩	石刃	二側縁	沢田ほか 94

（3）その他（参考）

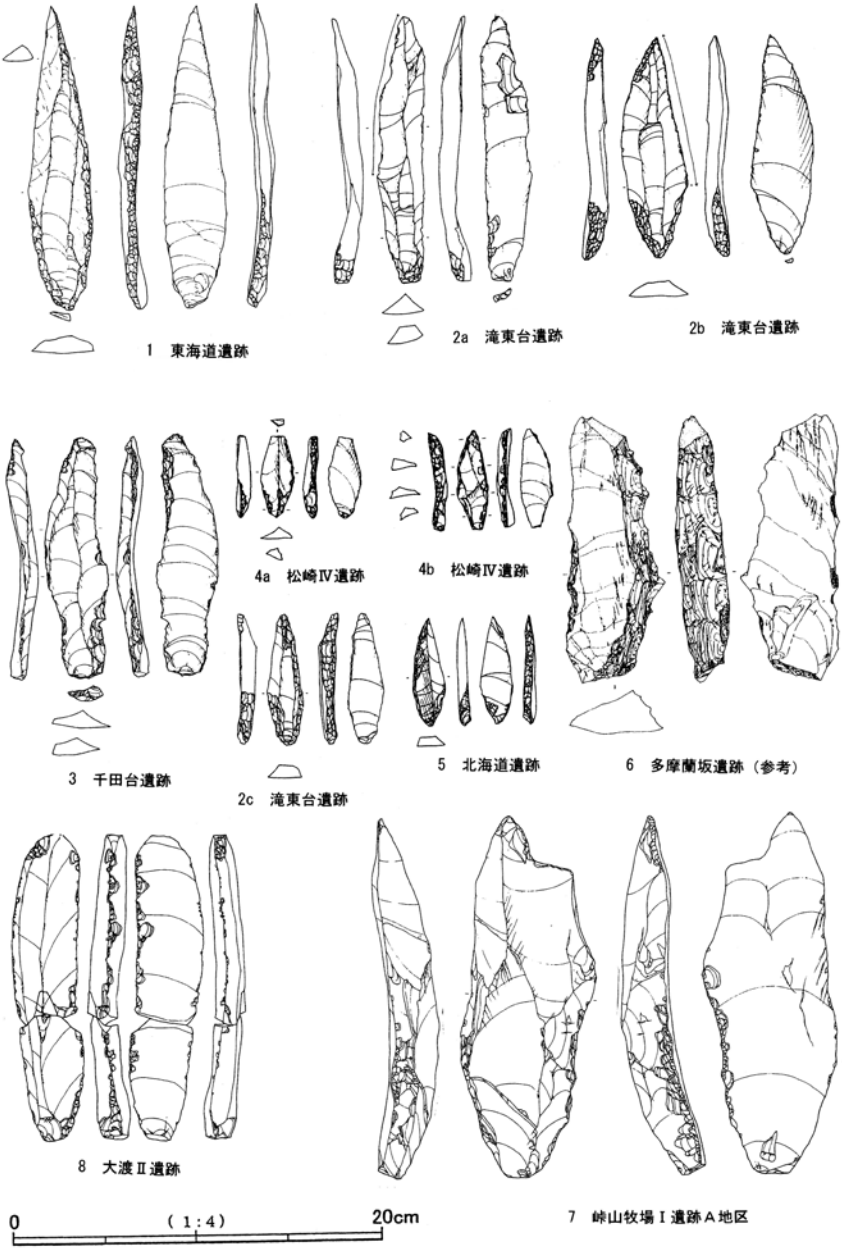
No.	遺跡名	所在地	出土状態	下総編年（立川ローム）	大きさ (cm-g) 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	素材	整形加工	文献
1	多摩蘭坂（たまらんざか）	東京都国分寺市	遺物集中5	Ⅱb期（Ⅳ下・Ⅴ層）	14.4	5.3	2.3	173	頁岩（在地）	縦長剥片	一側縁	舘野ほか 80

註：下総編年は『房総考古学ライブラリー1』参照（田村・橋本 1984）

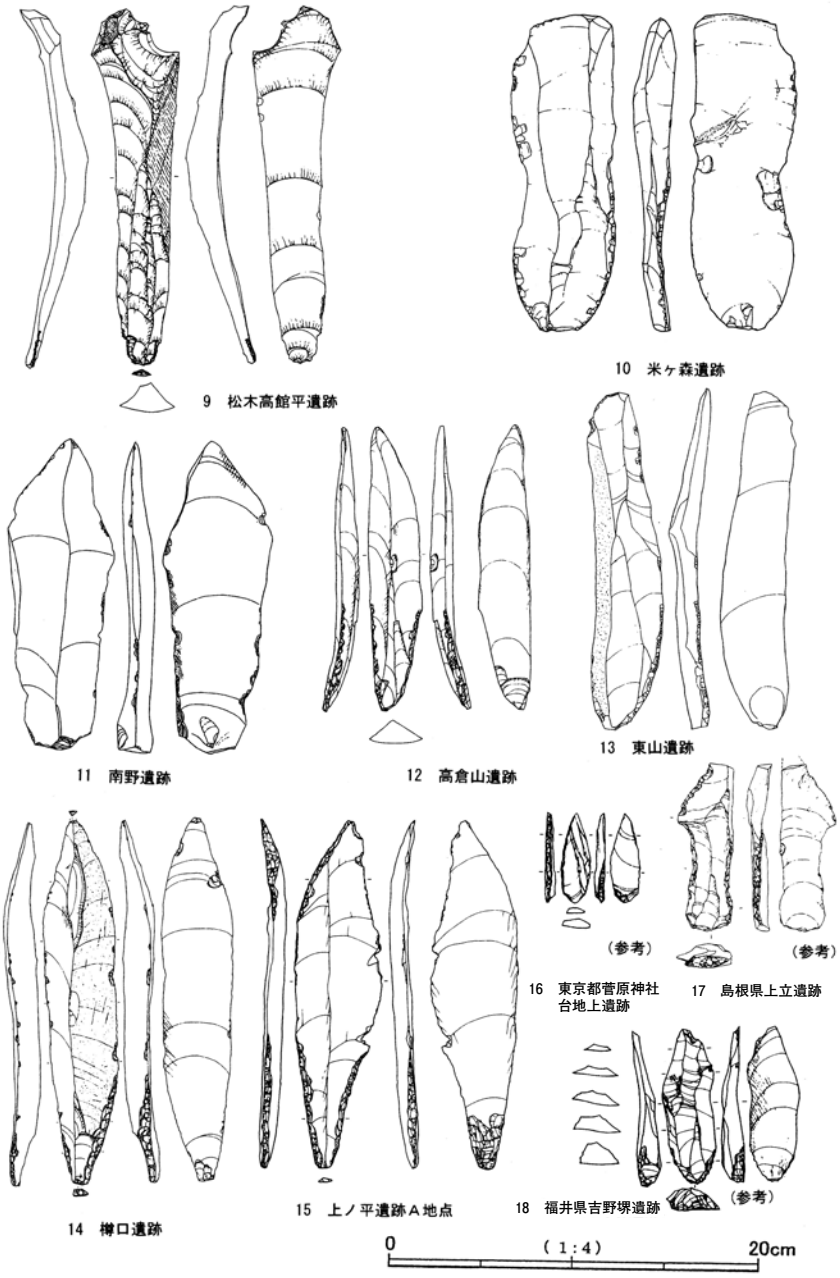
第1表　東海道遺跡出土のナイフ形石器関連資料一覧（参考資料を含む）


南野遺跡
米ヶ森遺跡
松木高館平遺跡
高倉山遺跡
大渡Ⅱ遺跡
樽口遺跡
峠下牧場Ⅰ遺跡Ａ地区
東山遺跡
千田台遺跡
上ノ平遺跡Ａ地点
0
100 km
滝東台遺跡
東海道遺跡
0
10 cm
石器のスケール

第４図　関連遺跡分布図


1 東海道遺跡
2a 滝東台遺跡
2b 滝東台遺跡
3 千田台遺跡
4a 松崎Ⅳ遺跡
4b 松崎Ⅳ遺跡
2c 滝東台遺跡
5 北海道遺跡
6 多摩蘭坂遺跡（参考）
8 大渡Ⅱ遺跡
7 峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地区
0
（1：4）
20cm

第５図　関連資料（1）


9　松木高館平遺跡
10　米ヶ森遺跡
11　南野遺跡
12　高倉山遺跡
13　東山遺跡
14　樽口遺跡
15　上ノ平遺跡Ａ地点
16　東京都菅原神社台地上遺跡
17　島根県上立遺跡
18　福井県吉野堺遺跡
（参考）
（参考）
（参考）
0
（1：4）
20cm

第６図　関連資料（2）

さらに、大半が素材の長さが復元可能な基部加工の資料であり、二側縁加工の東海道のナイフ形石器については、素材の長さという観点では、他を凌駕する可能性もある。

関連資料の時期については、立川ローム層に対比可能な資料は、わずか二例（峠山牧場Ⅰ遺跡A地区、樽口遺跡）に過ぎず、しかも、これらの資料の時間的位置づけにしても確実視できない。その背景にはローム層の堆積が薄く、層位的出土例や確実な年代測定値に恵まれない東北・北陸方面の地域事情がある。それ故、この方面では古くから編年研究が大きな課題となっている（沢田二〇一八）。

その一方で、東北頁岩製石器がダイレクトに搬入された関東地方の状況は、東北地方の反映であることは言うまでもない。ついてはローム層が安定的に堆積し、層位的な検出が可能な関東地方の東北頁岩製石器群が、東北編年の確立に寄与することを期待したい。

三　資料の評価―南関東における位置づけ―（第7～第9図、第2表）

では本例の登場の歴史的な背景についてはいかがであろうか。後述するように、下総をはじめ南関東においては東北頁岩を素材とした石刃生産技術が最も盛行する時期は、大きく立川ローム層のⅥ層段階（東海道例）とⅦ層段階と捉えられ、相互に密接な関係性をもって推移している。ついては、本稿では、当該期の全体像をふまえて東海道例の時間的な位置づけを考察することとしたい。

1　下総台地における関連資料の検討

技術的特徴　この頃の技術基盤は、大枠では石刃生産技術、一般的剥片生産技術、両極打法（「遠山技法」）のいずれかの組み合わせで成り立っている。

石刃生産の技術要素には、打面再生、稜形成の加撃面調整、打面調整及び頭部調整等がある。柏市中山新田Ⅰ遺跡や八千代市仲ノ台遺跡等の資料によれば、すでにⅨ層段階から必要に応じて行使されている模様であるが、発展・定着するのはⅥ・Ⅶ層段階である。

石器石材としては、黒曜石と東北頁岩が双璧である。黒曜石は信州系を主とし、角礫状の原石から入念な石核調整を経て中・小の石刃が生産されている。これに対して、東北頁岩は基本的に石核が少なく、素材、製品で搬入されている。

一方、新田浩三によって提唱された石刃素材の、いわゆる「下総型石刃再生技法」（第7図）は、Ⅸ層上部～Ⅵ層段階に出現し、一定の時間幅がある。石刃を垂直に折断し打

面部分を形成したのち、折れ面を加撃することによって側縁に沿って、ほぼ平行に樋状剥離が繰り返される。いわゆる「有樋石刃」が小石刃の生産のための石核か、刃部再生なのかは決着をみていないが、東北頁岩との結びつきと石材消費地における資源の有効利用の一環という点では意見が一致している（新田一九九五）[4]。

今のところ下総型石刃再生技法の関連資料は、下総方面に関連資料がまとまっているようであるが、この点で東北地方との間に介在する茨城・栃木方面の状況が気になるところである。この方面では、関連遺跡が数か所（茨城県西光遺跡・上境旭台遺跡・永国遺跡、栃木県中根遺跡・伊勢崎Ⅱ遺跡・寺平遺跡など）にすぎずあまり明確ではないが、下総の方が石刃の変形度や再加工の度合いが高いこと（有樋石刃の多産と石刃石核の減少）が指摘される。その要因としては、石材産地からの距離の遠近が考えられる。

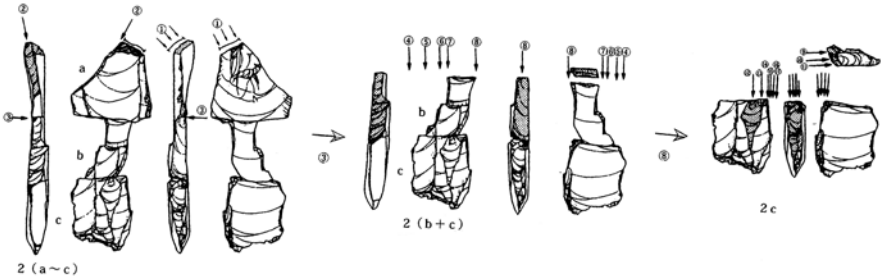
なお、いわゆる「遠山技法」については、とかく時空分布や技術的な特殊性が強調されがちであるが、遠山遺跡が位置する下総東部では、時期を問わず在地の小円礫を用いた楔形石器が出土しており、技術的にも通常の両極打法の範疇で十分理解が可能と考えている[5]。

石器組成　主な器種としては、ナイフ形石器、掻器、削器、彫刻刀形石器、楔形石器及び石錐がある。ナイフ形石器の他に、楔形石器の比重が高いことが特徴的であり、第二黒色帯上部では頻出する。また、前述のとおりⅥ層上部を主体とする掻器の出土例が注目される。掻器については、市原市細山（2）遺跡においてⅨ層上部から石刃素材の資料（信州系黒曜石）が単体で発見された模様であるが、島立桂が主張するように本格的な導入は当該期と考えられる（島立二〇一六）。その背景としては堤隆の言うように「寒冷地適応戦略としての皮革利用の重要性」にあり、考古学的には寒冷地仕様の一環と推定される（堤二〇〇〇）。

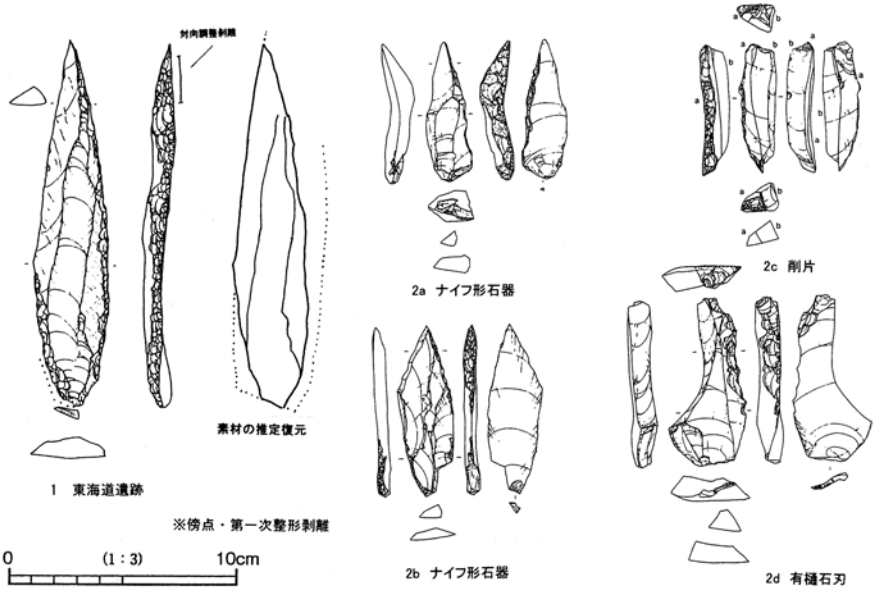
石器石材　当該期の岩種は、東北頁岩、黒曜石、黒色頁岩及び黒色安山岩が基本となっている。これらの石器石材の使用状況については、印旛沼低地を境として東西の地域性が見られ、時期によって多少異なるが、下総西部は信州系黒曜石と利根川系の黒色頁岩・黒色安山岩、下総東部は東北頁岩が主体となっており、東北頁岩の不足分については、在地石材で補完している。

黒曜石は前述のように、信州系を主体としている。黒曜石は当初角礫で搬入されたが、地域内で板状になるまで小型化している。このような下総西部における黒曜石の徹底消費が、下総東部の東北頁岩製石器群の見かけ上の顕在化を招いた一因と考えられる。

一方、東北頁岩には運搬や再加工・転用に向く物性があ



第７図 下総型石刃再生技法の典型例（香山新田中横堀〈空港 No.7〉遺跡）



第８図　東海道遺跡のナイフ形石器と下総型石刃再生技法の好例（柏市小山台遺跡）

り、かつその搬入形態は製品や素材が多く、原石は稀である。東北頁岩は、Ⅸ層以前にも散見されるが、Ⅶ・Ⅵ層段階に急増し石刃技法の発達と呼応している。石刃を素材とした石器製作・再生の痕跡は下総東部に多く、多様な母岩別資料を特徴としている。

時間的位置づけ　先に述べたように、下総をはじめ南関東においては、東北頁岩を素材とした石刃生産技術が最も盛行する時期は、Ⅵ・Ⅶ層段階である。南関東での出土例は、武蔵野台地東縁部の東京都板橋区菅原神社台地上遺跡で豊富な資料が知られているものの、主たる分布はほぼ下総台地周辺に限られる。むろん石刃生産そのものは、南関東一円に多くの資料が見られるが、東北頁岩を念頭に置くと、古利根川以東に偏っており、地域的にかなり限定されるようである。

さて、下総台地におけるⅥ・Ⅶ層の段階の石器群については、「房総考古学ライブラリー1」刊行（田村・橋本一九八四）以後、膨大な資料が蓄積され、地域相を中心としてさまざまな論議を呼んでいる。

従来の研究成果を念頭に置き、資料操作の便を図るために、第2表のとおり下総全域の再構築を試み、様相解明の第一歩とした。ただし、この大別三群、細別五類という区分は、あくまで基本形を提示したにすぎず、中間的な内容の石器群もあり、厳密に区分できるわけではない。また、相互に関連し合っており、時間的序列や地域性等の固定化を必ずしも意味しない。

第Ⅰ～Ⅱａ群は南関東の一般的様相を、第Ⅱｂ～Ⅲ群が下総特有の様相を呈している。換言すれば、前者は南関東特有の石器群として相模野台地・武蔵野台地の石器群の流れを汲むのに対して、後者は下総方面の地域相と捉えられる。

三つのうち、大略、第Ⅰ群はⅥ層段階、第Ⅱａ・Ⅲ群はⅦ層段階に属する。これに対して、第Ⅱｂ群は、ほぼ通有の石器群と認識されるが、仔細にみれば、Ⅵ層上部では第Ⅱｂ群は、ほとんど影を潜める。以上の点から、薄い層厚が危惧されるが、群単位では、大枠として、第Ⅱａ群・Ⅲ群→第Ⅰｂ群・第Ⅱｂ群→第Ⅰａ群の順に推移したものと推測される。

Ⅶ層段階には、印旛沼・鹿島川水系を境として、下総西部に第Ⅱａ群、下総東部に第Ⅱｂ群と第Ⅲ群が主体的にみられる。このうち第Ⅱａ群は南関東における一般的なナイフ形石器主体の一群であり、第Ⅱｂ群はⅨ層上部の横芝光町木戸台遺跡を最古として、大網白里市沓掛貝塚、市原市草刈遺跡Ｃ区・武士遺跡等Ⅵ層段階まで継続する。また、第Ⅲ群の楔形石器は下総全域に広がりを見せるが、下総台

第Ⅰ群　中・小型石刃を素材とする石器群		
a類：ナイフ形石器を主体として、掻器を組成する一群	主な遺跡	：成田市飯仲金堀遺跡、佐倉市栗野遺跡、香取郡多古町千田台遺跡、旭市桜井平遺跡、千葉市馬場遺跡、大網白里市砂田中台遺跡、木更津市下野洞遺跡
	遺跡分布	：下総全域（比較資料：神奈川県藤沢市慶應義塾藤沢校地内遺跡、東京都（世田谷区祖師谷大道北遺跡・嘉留多遺跡）、群馬県（高崎市多胡蛇黒遺跡、伊勢崎市波志江西宿遺跡）、茨城県（牛久市西ノ原遺跡、つくば市中原遺跡、筑西市中根十三塚遺跡）、栃木県（芳賀郡茂木町寺平遺跡）
	時　　期	：立川ロームⅦ層上～Ⅵ層上（Ⅵ層主体）
	石器組成	：ナイフ形石器主体。他に掻器、削器、彫刻刀形石器、楔形石器及び石錐等。
	石材組成	：信州系黒曜石と東北頁岩が二大石材。ただし岩石種が多様化。
	技術特性	：石刃・縦長剥片系を主体とするが、精緻な調整技術は影を潜める。時として下総型石刃再生技法（千田台、桜井平）を採用。
b類：ナイフ形石器を主体とする一群	主な遺跡	：流山市若葉台遺跡、柏市水砂遺跡・聖人塚遺跡・道堀遺跡、鎌ケ谷市上葉貫台遺跡、印西市泉北側第２遺跡・木苅峠遺跡、八千代市権現後遺跡、佐倉市木戸場遺跡、四街道市出口・鐘塚遺跡、千葉市押沼第一遺跡・小中台（２）・新堀込遺跡
	遺跡分布	：下総西部（比較資料：神奈川県綾瀬市寺尾遺跡、東京都（小平市鈴木遺跡、調布市飛田給北遺跡）、埼玉県富士見市栗谷ツ遺跡等）
	時　　期	：立川ロームⅥ層
	石器組成	：ほぼナイフ形石器に限定。
	石材組成	：信州系黒曜石と東北頁岩が二大石材であるが、遺跡によって量比が異なる。ただし、小中台（２）・新堀込では高原山産黒曜石、下総西部の水砂と聖人塚では黒色頁岩が主体。
	技術特性	：調整技術が発達した石刃技法が主体。
第Ⅱ群　大型石刃を素材とする石器群		
a類：ナイフ形石器を主体とする一群	主な遺跡	：鎌ケ谷市東林跡遺跡、松戸市野見塚遺跡、白井市復山谷遺跡、八千代市北海道遺跡、四街道市出口鐘塚遺跡・御山遺跡、佐倉市池向遺跡、東金市鉢ヶ谷遺跡
	遺跡分布	：主として下総西部（関連遺跡：東京都板橋区菅原神社台地上遺跡、茨城県（稲敷郡美浦村陣屋敷遺跡・根本遺跡、土浦市永国遺跡、つくば市上境旭台遺跡、那珂郡東海村西光遺跡）、栃木県真岡市伊勢崎Ⅱ遺跡）
	時　　期	：立川ロームⅦ層
	石器組成	：ナイフ形石器主体。他に掻器、削器、彫刻刀形石器、及び楔形石器等。
	石材組成	：黒色頁岩、黒色安山岩、信州系黒曜石、及び東北頁岩が主体。
	技術特性	：調整技術が発達した石刃技法が主。時として、これに下総型石刃再生技法が介在。
b類：下総型石刃再生技法を主体とする一群	主な遺跡	：柏市小山台遺跡・矢船Ⅰ・Ⅱ遺跡、流山市市野谷向山遺跡・市野谷芋久保遺跡、印西市宮内遺跡、佐倉市向原遺跡、八街市榎戸小富遺跡、山武郡芝山町香山新田中横堀（空港№7）遺跡・芝山西ノ台遺跡・古宿上谷遺跡、山武郡横芝光町木戸台遺跡、東金市滝東台遺跡、大網白里市升形遺跡・沓掛貝塚、香取郡多古町一鍬田甚兵衛山西（空港№16）遺跡、市原市武士遺跡・草刈遺跡Ｃ区
	遺跡分布	：主として下総東部
	時　　期	：立川ロームⅨ層上～Ⅵ層
	石器組成	：ナイフ形石器、大型・小型石刃、石刃素材石核、有樋石刃及び彫刻刀形石器等。
	石材組成	：大半が東北頁岩
	技術特性	：調整技術が高度に発達した石刃技法と下総型石刃再生技法の共存。
第Ⅲ群		
楔形石器を主体とする石器群（両極打法＝「遠山技法」）	主な遺跡	：山武郡横芝光町遠山天ノ作遺跡、香取市出口遺跡、佐倉市芋窪遺跡・大林遺跡・大堀遺跡（Ⅶ層）、山武市四ツ塚遺跡・赤羽根遺跡（Ⅸ層）
	遺跡分布	：主として下総東部（比較資料：土浦市下郷古墳群（石刃素材の楔形石器製作跡・黒色頁岩製）
	時　　期	：立川ロームⅨ～Ⅶ層
	石器組成	：楔形石器主体。他の器種がほとんど介在せず、少量のナイフ形石器及び削器が共伴。
	石材組成	：安山岩、チャート等の小型円礫（礫層起源）
	技術特性	：非石刃系であるが、小石刃の生産に関与という見解もある。①剥片・石刃素材：芋窪・大林・大堀、②円礫素材：遠山天ノ作、出口、東峰御幸畑西（空港№61）

第２表　下総台地における立川ロームⅥ・Ⅶ層段階の石器群の様相とその変遷

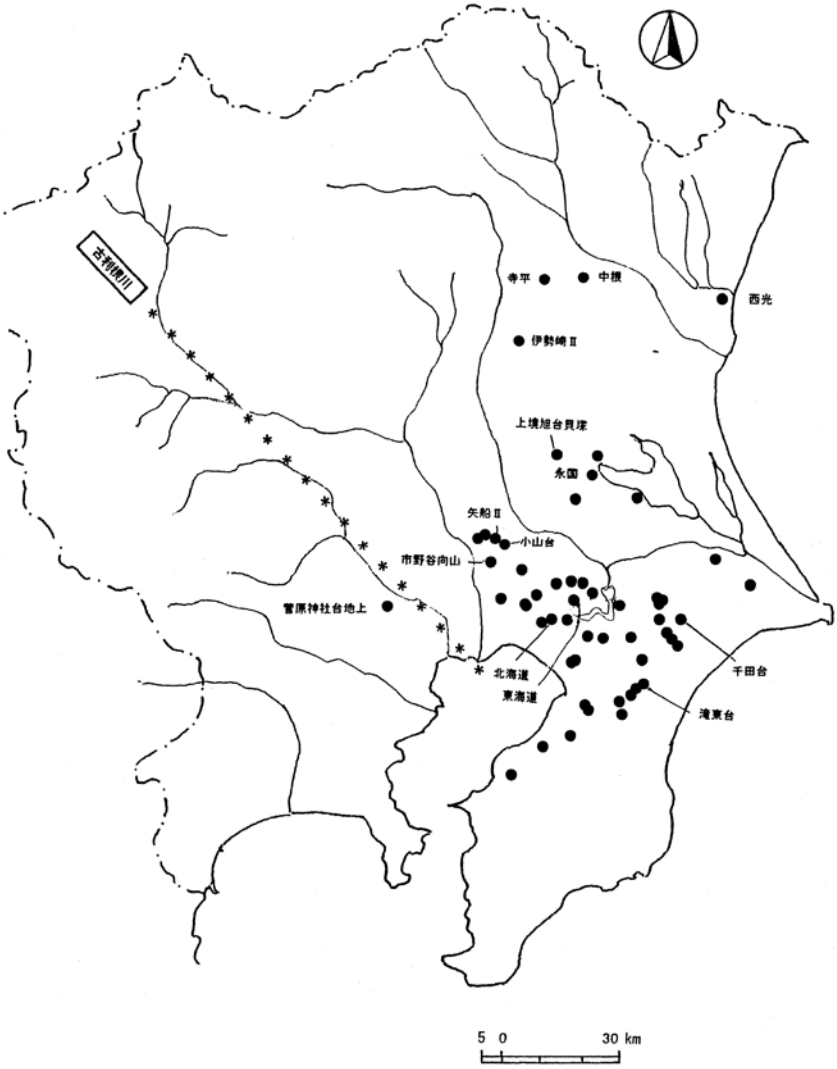
地東縁では、集中的な生産の痕跡が見られ地域色が濃厚である。ちなみに、周辺地域では、茨城県土浦市下郷古墳群の楔形石器の一群（石刃素材）が関連づけられる（平石二〇〇〇）。

Ⅵ層段階になると、下総西部では信州系黒曜石と東北頁岩を二大石材とした石刃石器群（第Ⅰb群）、下総東部では、引き続いて東北頁岩製石刃を素材としたリダクション型の石器群（第Ⅱb群）が存続する。このうち、下総西部の信州系黒曜石と東北頁岩の量比については、遺跡単位の偏在性（遺跡間変異）が従来から指摘されている。基本的には首肯できるが、流山市若葉台遺跡、印西市泉北側第二遺跡・木苅峠遺跡、八千代市権現後遺跡、柏市道堀遺跡、佐倉市木戸場遺跡などの東京湾に近い地域の遺跡では、（信州系）は黒曜石優位となっており、東北頁岩が多用されている例は少数派である。

Ⅵ層上部に至り、Ⅳ下・Ⅴ層段階への過渡的な第Ⅰa類が下総全域に主体的に分布する。下総西部の黒曜石、下総東部の東北頁岩という石材の使用傾向はこの時期にも基本的に堅持されるが、岩石種が多様性を増す一方、東北頁岩の急激な減少が地域を超えて現象化する。また、石刃生産に関わる石核の調整頻度は低下傾向にある。

さて、以上の石器群の中で東海道例は大枠では第Ⅱ群に位置づけられる。単独出土のためその評価は難しいが、結論としては、先の「下総型石刃再生技法」に関連づけられる。下総型の遺跡内への搬入形態については、新田によればこれまで「大型・中型石刃」とされていたが、その後、柏市小山台例からは、氏が自ら吐露したように「大型のナイフ形石器を素材」とした資料が出土している（新田二〇一七）。すなわち小山台例は、下総型の母型（素材）には石刃のみならずナイフ形石器もあることを指し示しており、東海道遺跡の超大型ナイフ形石器についてもその可能性が考慮されるのである（第8図）。

しかしながら、その一方で追加の整形剥離が施され、関東風の形態改変が行なわれていることを考えれば、単なる下総型の母型とするわけにはいかない。そして、①従来のナイフ形石器に比べてあまりにも長大であること、②精製品であること、③関東以西では唯一の超大型例（希少性）であることを勘案すれば、当該資料については実用品ではなく、儀礼や儀式などの当時の精神文化の産物の可能性も浮上する[6]。ただし、東北・北陸方面の事例については大型石刃石器群の一員であり、素材の石刃の大きさについても超大型ナイフ形石器を超える例が垣間見られる[7]。したがって、このことについては、現状では、関東の地域色としておいた方が安全であろう。



第９図　下総台地の主な関連遺跡とその広がり

（立川ロームⅥ・Ⅶ層段階）

註：遺跡名が非表示のものは拙稿（橋本 2006）参照。

2　搬入形態と搬入ルート（第９図）

下総における東北頁岩の搬入形態については、その多くが原石ではなく素材、製品・母型であり、信州系黒曜石とともに徹底的に消費され、不足分は関東在地の近隣石材で補うという構図が想定される。

その一方で、東北方面から関東への流入経路にあたる東関東方面（栃木・茨城方面）の状況が気になるところであるが、先に述べたように、この方面では調査の立ち後れのため、検討可能な資料は限られている。したがって詳細については、資料の蓄積を待つほかはない。

ただし、旧石器時代遺跡の調査が進む群馬方面の資料が限られていることから、東北地方から下総への東北頁岩製石器については、主として東関東の茨城・栃木方面を経由してもたらされたものと推定される[8]。

そして、図示したように、そのルートの終わりには古利根川(現・荒川筋)が控えていたものと推察される。ちなみに、この古利根川ラインは、旧石器時代に通時的に存在し縄文時代以降には消失したことが解っている（橋本二〇二二a・b）。ただし、その成立の背景については今のところ謎とせざるを得ない。

おわりに―資料の意義―

これまで述べたように、東海道遺跡出土のナイフ形石器は東北・北陸以外では最大であり、かつ優美である。そして希少性も高く、その形態は東北地方では他に類をみない。

これに対して同一形態のものは、関東の小型例にままみられる。先に述べたように、①同一形態の超大型例が東北頁岩の本場（東北・新潟北部）にはないこと、②超大型例の大半が基部整形のナイフ形石器であること、③当初の整形剝離痕が基部付近に残存していること、を考えあわせると、関東への搬入形態は、素材（石刃）ではなくおそらく基部整形のナイフ形石器であり、関東に搬入後に追加の整形剝離が施され二側縁加工のナイフ形石器にアレンジされたものと推察される。

機能面については、前節で下総型石刃再生技法の母型と精神文化の産物という二面性を指摘した。しかしながら、後者については今のところ類例に欠けるために、可能性の域を出ない。真の意味での位置づけは今後の課題であり、検証に向けて資料の蓄積が待たれるところである。

謝辞　本稿を草するにあたり以下の方々からご教示・ご協力を賜った。末筆ながら記して深甚の謝意を表するもので

ある。

小菅將夫、飯島伸一、根本岳史、小倉和重、喜多裕明、新田浩三、鹿又喜隆、山岡磨由子、澤田敦、村上市教育委員会、印西市教育委員会、公益財団法人印旛郡市文化財センター、公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団、石川県埋蔵文化財センター、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、島根県立八雲立つ風土記の丘。

（註）

1　対向調整剥離とは、剥片の表裏から垂直に近い角度で剥離を行うナイフ形石器の整形加工の一種である。その結果「両方向からの剥離痕が背部中央で交錯する。」（佐藤二〇二一）。この種の調整は、厚みのある部分の加工に適用されており、製作時の器体の安定性と効果的な剥離の観点から、両極打法が用いられたものと推定される。対向調整剥離は関東特有の技術ではなく、東北・北陸方面でも宮城県賀篭沢遺跡（大場二〇〇四）・西野田遺跡（丹羽ほか一九七四）、山形県上ミ野遺跡（羽石ほか二〇〇四）・八森遺跡（橋本二〇二二ａ）・越中山Ｋ遺跡（加藤一九七五）、新潟県樽口遺跡（立木ほか一九九六）のナイフ形石器の整形剥離に適用されている。

2　下総においては、当該期のナイフ形石器の長さは三～五センチメートル程度であり一〇センチメートルを超えるものは稀である。

3　北陸・山陰方面の主な資料としては、富山県福光町嫁兼平林遺跡（稲田一九八六・一九八八）・上市町眼目新丸山遺跡（稲田一九八六・一九八八）、石川県辰口町灯台笹遺跡（稲田一九八六・一九八八）・金沢市金沢城下町遺跡（金山ほか二〇一四）、福井県永平寺町吉野堺遺跡（青木ほか二〇一四：第六図一八）、鳥取県米子市小波原畑遺跡（稲田一九八六、鳥取県埋蔵文化財センター一九八八）、島根県松江市上立遺跡（丹羽野二〇〇一：第六図一七）がある。このことから日本海側の遺跡分布の南限については、島根県松江市付近と考えられる。しかしながら、時期決定に必要な東北・北陸編年が不確定なために、これらの資料と関東地方との時間的な対比は今のところ困難である。

4　下総型石刃再生技法とは、「下総台地のⅦ層からⅥ層段階の石器群のうち、大形・中形石刃を石器素材として搬入し、石刃の縁辺を頻繁に再生し、新鮮な縁辺あるいは、刃部の作り出しを行うものをいう。また、このような石刃の再生が主体的であるが、再生の際に剥離された剥片・小形石刃も再利用するものも副次的にみとめられる。このような石刃の究極までの再利用を行う技法をさす。」（新田一九九五）。なお、「有樋石刃」は彫刻刀面作出又は小石刃の剥離の失敗品であり、しばしばその場に残置されている。

5 ちなみに、道澤明によれば、下総の楔形石器関連遺跡は、旧石器時代～縄文草創期だけでも七五か所を数える。このうち立川ロームⅥ・Ⅶ層段階のものは三〇か所を超え大勢をなす（道澤二〇一九）。

6 精神文化の産物か否かについては、このほかに使用痕の有無も重要な判断材料（実用・非実用）のひとつと考えられる。先に述べたように使用痕については肉眼では確認できなかったが、その真偽については顕微鏡下の子細な分析を待って判断したい。

7 ちなみに、第1表のうち高倉山遺跡、東山遺跡（素材）、南野遺跡（掻器）、松木高館平遺跡、及び峠下牧場Ⅰ遺跡A地区がこれに該当する。

8 茨城・栃木方面の遺跡分布が希薄な理由としては調査の遅れが考えられる。これに対して、群馬方面では調査の進展が著しいが、資料はさほど蓄積されていない。ちなみに、岩宿博物館の小菅將夫氏によれば、東北頁岩製のナイフ形石器の出土例としては渋川市房谷戸遺跡・勝保沢中ノ山遺跡、前橋市今井三騎堂遺跡ⅣA地点・今井見切塚遺跡・熊の穴Ⅱ遺跡、舞台遺跡があるという。このうち立川ロームⅦ層段階の資料については、前橋市今井見切塚遺跡・熊の穴Ⅱ遺跡、伊勢崎市舞台遺跡が該当するが散発的である。

引用参考文献

青木隆佳・赤澤徳明・富山正明『吉野堺遺跡―中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査一三―』（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、二〇一四年）。

伊藤弘一『千葉県印西市前戸遺跡―印西市道〇〇－一一六号線埋蔵文化財調査―』（印旛郡市文化財センター、二〇〇五年）。

稲田孝司「中国地方旧石器文化の諸問題」（『岡山大学文学部紀要』七、一九八六年）七五～九四頁。

稲田孝司「文化と集団」（『古代史復元一　旧石器人の生活と集団』講談社、一九八八年）一三一～一三六頁。

印旛郡市文化財センター「東海道遺跡―超大型のナイフを携えた狩人―」（『令和三年度最新考古資料展』二〇二一年a）。

印旛郡市文化財センター「印西市東海道遺跡（第二地点二次）」（『広報誌　フィールドブックvol.四六』二〇二一年b）。

印旛郡市文化財センター「（一二）　印西市東海道遺跡（第二地点二次）（〇九－一五〇）」（『公益財団法人　印旛郡市文化財センター年報三七―令和二年度―』二〇二二年）一〇～一一頁。

宇田川浩一「大館市松木高館平遺跡出土の旧石器について」（『秋田考古学』第四七号、秋田考古学協会、二〇〇一年）六二～六七頁。

大内千年ほか『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書五　印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡』（千葉県文化財センター、二〇〇六年）。

大場正善「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について―東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の玉髄原産地遺跡からの予察―」（『宮城考古学』第六号、宮城県考古学会、二〇〇四年）一～三四頁。
奥田正彦ほか『主要地方道成田松尾線Ⅲ』（遠山天ノ作遺跡）（千葉県文化財センター、一九八六年）。
加藤稔「越中山遺跡」（『日本の旧石器文化』第二巻、雄山閣、一九七五年）一一二～一三七頁。
加藤稔・佐々木洋治「〈資料紹介〉山形県小国町東山発見の旧石器群」（『山形考古』第二第三号、山形考古学会、一九七八年）八四～九六頁。
金山啓哉ほか『金沢市金沢城下町遺跡（丸の内七番地点）一』（石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター、二〇一四年）。
鹿又喜隆ほか『東北文化資料叢書第九集　最上川流域の後期旧石器文化の研究三　高倉山遺跡』（東北大学大学院文学研究科考古学研究室、二〇一六年）。
北沢実ほか『帯広・川西C遺跡』（帯広市教育委員会、一九九八年）。
工藤雄一郎「三　旧石器時代研究における年代・古環境論」（『講座日本の考古学一　旧石器時代（上）』青木書房、二〇一〇年）一二四～一五五頁。
工藤雄一郎『旧石器・縄文時代の環境文化史』（新泉社、二〇一二年）。
工藤雄一郎「暦年較正曲線Intcal20と日本列島の後期旧石器時代の年代」『旧石器研究』第一七号、日本旧石器学会、二〇二一年）一～一四頁。
黒沢崇『印西市道〇〇－〇二六号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書　印西市東海道遺跡』（千葉県教育振興財団文化財センター、二〇一四年）。
小菅將夫『第六二回企画展　ナイフ形石器―発達期の石器群を追う―』（岩宿博物館、二〇一六年）。
佐川正敏・大場正善「賀篭沢遺跡二〇〇三年度の発掘調査の成果」（『第一七回東北日本の旧石器文化を語る会　予稿集』東北日本の旧石器文化を語る会、二〇〇三年）四一～五三頁。
佐久間光平ほか（宮城県考古学会　旧石器部会）『宮城の旧石器時代遺跡』（二〇一八年）。
佐藤良二「対向調整剝離」（『旧石器考古学辞典　四訂版』旧石器文化談話会、学生社、二〇二一年）一三七頁。
沢田敦「一　東北日本における後期旧石器時代編年―課題と展望―」（『東北日本の旧石器時代』東北日本の旧石器文化を語る会、二〇一八年）四九～六一頁。
沢田敦ほか『上ノ平遺跡A地点』（新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団、一九九四年）。
椎名信也『油井古塚原遺跡群』（山武郡市文化財センター、一九九五年）。
渋谷孝雄・石川恵美子「第二章　旧石器文化の編年と地域性　二

東北地方」（『講座日本の考古学一　旧石器時代（上）』青木書店、二〇一〇年）三〇九～三五三頁。
島立桂「房総半島の掻器について」（『広島大学大学院文学研究科考古学研究室五〇周年記念論文集・文集』二〇一六年）七三～八八頁。
高橋義介・菊池強一『峠山牧場Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、一九九九年）。
立木宏明ほか『樽口遺跡』（朝日村教育委員会、一九九六年）。
舘野孝ほか『多摩蘭坂遺跡』（国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会、一九八〇年）。
田村隆・橋本勝雄『房総考古学ライブラリー一　先土器時代』千葉県文化財センター、一九八四年）。
堤隆「掻器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」（『考古学研究』四七－二、考古学研究会、二〇〇〇年）六六～八四頁。
東北日本の旧石器文化を語る会『第二〇回東北日本の旧石器文化を語る会　東北日本の石刃石器群』（二〇〇六年）。
富樫泰時ほか『米ケ森遺跡発掘調査報告書』（秋田考古学協会、一九七七年）。
鳥取県埋蔵文化財センター『旧石器・縄文時代の鳥取県』（鳥取県教育文化財団、一九八八年）。
中川重紀ほか『大渡Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、一九九五年）。
中川重紀ほか「岩手県大渡Ⅱ遺跡、峠下牧場Ⅰ遺跡A地区における石刃石器群の層位的出土例」（『第二〇回東北日本の旧石器文化を語る会　東北日本の石刃石器群』東北日本の旧石器文化を語る会、二〇〇六年）二八五～二九八頁。
長沢正機『南野遺跡発掘調査報告書』（新庄市教育委員会、一九七七年）。
永塚俊司ほか『新空港国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅣ―一鍬田甚兵衛山西遺跡（空港№一六遺跡）―』（千葉県文化財センター、二〇〇一年）。
中村由克・佐藤雅一「第二章　旧石器文化の編年と地域性　五中部地方」（『講座日本の考古学一旧石器時代（上）』青木書店、二〇一〇年）四三八～四七二頁。
西野雅人・鈴木弘幸・古内茂『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書一　印西市松崎Ⅱ遺跡』（千葉県文化財センター、二〇〇三年）。
新田浩三「下総型石刃再生技法の提唱」（『千葉県文化財センター研究紀要一六―二〇周年記念論集―』千葉県文化財センター、一九九五年）一～四〇頁。
新田浩三「南関東地方東部の石器群」（『岩宿フォーラム二〇一六／シンポジウムナイフ形石器文化の発達期と変革期―浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群―　予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会、二〇一六年）六六～七八頁。

新田浩三『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書―柏市小山台遺跡―　旧石器時代編』（千葉県教育振興財団、二〇一七年）。
丹羽茂・柳田俊雄・阿部恵「西野田遺跡」『東北新幹線関係調査報告書』宮城県教育委員会、一九七四年）一九～一六〇頁。
丹羽野裕「松江市出土の石器三点―上立遺跡・白鹿谷遺跡・大門遺跡―」（『松江考古』第九号、松江考古学談話会、二〇〇一年）一～一二頁。
橋本勝雄ほか『八千代市北海道遺跡』（千葉県文化財センター、一九八五年）。
橋本勝雄「南関東における石刃石器群（素描）―下総台地の立川ローム Ⅵ・Ⅶ層段階から―」（『第二〇回東北日本の旧石器文化を語る会　東北日本の石刃石器群』東北日本の旧石器文化を語る会、二〇〇六年）二六四～二八四頁。
橋本勝雄「東日本における国府系石器群の特質とその意味―翼状剥片と有底横長剥片―」（『旧石器考古学』八六、旧石器文化談話会、二〇二二年a）一～二〇頁。
橋本勝雄「下総台地からみた旧石器時代の東北頁岩製石器の特質―関東地方の調査成果を中心として―」（『岩宿フォーラム二〇二二／シンポジウム　東北頁岩と北関東地方―　予稿集』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会、二〇二二b）五六～六九頁。
羽石智治・会田容弘・須藤隆編『最上川流域の後期旧石器文化の研究一　上ミ野遺跡第一・二次発掘調査報告書』（東北大学大学院文学研究科考古学研究室、二〇〇四年）。
比田井民子ほか『菅原神社台地上遺跡』（東京都埋蔵文化財センター、一九九七年）。
平石尚志『一般国道三五四号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書　下郷古墳群』（茨城県教育財団、二〇〇〇年）。
道澤明『令和元年度企画展　謎の石器　楔形石器展示図録』（横芝光町教育委員会、二〇一九年）。
宮城旧石器研究会「加美町薬莱山麓の旧石器遺跡（四）―薬莱山No.８遺跡（一）」（『宮城考古学』第一九号、宮城県考古学会、二〇一七年）一〇七～一二〇頁。
宮城旧石器研究会「加美町薬莱山麓の旧石器遺跡（五）―薬莱山No.８遺跡（二）」（『宮城考古学』第二一号、宮城県考古学会、二〇一九年）一五三～一六六頁。
村木敬「三　岩手県における旧石器時代から縄文時代草創期に相当する石器群の変遷と分布」（『東北日本の旧石器時代』東北日本の旧石器文化を語る会、二〇一八年）七一～八五頁。
矢本節朗・渡辺高弘『多古町　千田台遺跡』（千葉県文化財センター、一九九六年）。

正誤表

頁	段	行	誤	正
2	下	2	形態は、全体の	全体の
6	―	―	峠下牧場Ⅰ遺跡A地区	峠山牧場Ⅰ遺跡A地区
9	下	1	Ⅵ層段階（「東海道例」）とⅦ層段階	Ⅵ層段階とⅦ層段階（「東海道例」）
10	上	17	遠山遺跡	遠山天ノ作遺跡
14	上	13・14	（信州系）は黒曜石	黒曜石（信州系）

【論考】

印旛沼北岸における中期末葉の弥生土器

―向辺田式の設定―

髙花宏行

はじめに

千葉県北部、下総地域における弥生時代中期から後期への土器様相の変化は、大枠的に言えば南関東系から東関東系への転換である。東関東系土器群が南側に分布範囲を拡大し、それに伴って南関東系土器群の分布範囲の縮小が進む中で、両者の接触地帯となる印旛沼周辺地域は、中期から後期への移行期は土器様相が複雑化する。

筆者は、過去に印旛沼周辺地域の後期の土器群について、調査事例の増加を踏まえて主要遺構出土土器の共伴関係の比較検討をもとにⅠ期～Ⅳ期の四段階に区分した[1]。既に二〇年以上も前のことである。しかも、四段階中のⅣ期については、現在は共通認識とされている茨城県北部を中心に分布する十王台式土器の細分が行われておらず、十王台式土器が後期後葉段階にのみ位置付けられていた時期で、十王台式に略並行する茨城県南部の土器である下大津式や上稲吉式の位置付けも同様であった。こうした時期の執筆であることを補足しておきたい。

筆者の四期区分については、その後、小林嵩[2]や小玉秀成[3]によって追検証とそれに伴う修正案が提示されている。ありがたいことである。特に小林は下総地域に加えて上総・安房地域も含めた千葉県全域で中期中葉から後期全般にかけての土器の変遷について検討を加えており、これまで下総と上総・安房で別々に検討されることが多かった土器様相の総合的な研究を進めている。

筆者は、これまで自身がフィールドとする下総地域、その中でも特に印旛沼周辺地域における中期末葉から後期土器の検討を行ってきた。後期では佐倉市臼井・江原台を中

心に分布する臼井南式の再設定[4]及び印旛沼西岸に分布する栗谷式の設定[5]を行った。ただし、自身の力量の限界から、小林や小玉のように広域的な検討は実施できていない。微力ではあるがこうした検討ができたのは、報告書の閲覧が中心ではあるものの、下総地域における中期後葉から後期の弥生土器の報告例に留意できる環境に置かれているお陰でもある。

その中で、八千代市域の土器でこれまでの型式の枠の中に当てはまらない文様構成を持つ土器に注目したのが、後期中葉の栗谷式の設定であった。

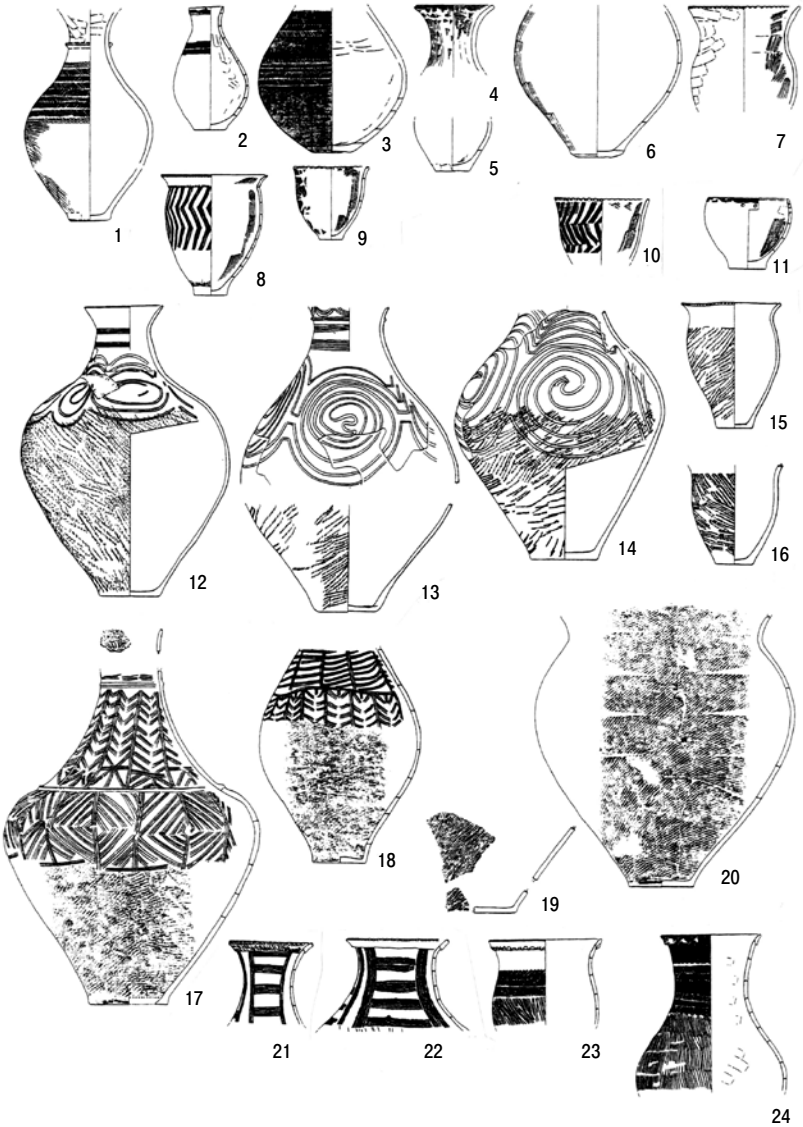
今般、栗谷式と同様にこれまでの型式の枠組みの中では捉えられない土器を印西市向辺田遺跡出土土器の一部で確認したので、資料調査の成果をもとに筆者なりの位置付けを考察する。

一　印西地域における中期後葉から後期初頭の遺跡と土器

本論に入る前に印旛沼周辺地域における中期後葉から後期初頭の土器を概観しておく（図1）。印旛沼南岸以南の地域には、汎東京湾沿岸地域に分布する宮ノ台式土器が展開する。宮ノ台式土器は櫛描文や帯縄文が施文される細頸壺と、ハケやナデ調整され僅かに頸部がすぼみ口縁部に向かって広がる無文の甕が主要な器種で、数量は少ないが広口壺、高坏、鉢により組成される（1～11）。印旛沼周辺地域では佐倉市六崎大崎台遺跡がこれまで調査された遺跡の中では検出された住居跡数が最も多く、環濠集落でもある。

印旛沼東岸以東は、宮ノ台式土器も分布するが、茨城県に分布の中心を持つ足洗式土器、そして足洗式土器に後続する阿玉台北式土器が分布し、前者と後二者が共伴する遺跡もみられる。

足洗式土器は沈線や半截竹管等により渦文（同相渦文）が胴部中央に大きく施文され、胴下部に附加条縄文が施文される細頸壺と、口縁部から頸部が無文となり胴部一面に附加条縄文が施文される甕が主要器種である（12～16）。後続する阿玉台北式土器になると壺では渦文が消失し、東北地方南部の桜井式土器や天神原式土器の影響を受けた口頸部に縦区画を伴う山形文や菱形文が施文される壺と、頸部無文や口頸部に複段の連弧文が施文される甕（佐野原甕）が主要器種で、近年では関東地方西部や中部地方の特徴である斜格子文が施文される甕も組成することが指摘されている（17～20）[6]。



宮ノ台式　　1 ～ 11：六崎大崎台 431 号住
足洗式　　12 ～ 16：関戸 044 号住
阿玉台北式　17 ～ 20：17・18 阿玉台北 B-010 号跡、19・20　同 B-011 号跡
大崎台式　　21 ～ 24：六崎大崎台 201 号住

(S=1/12)

図１　宮ノ台式・足洗式・阿玉台北式・大崎台式

ところが、後期に入ると下総地域は、南関東地方でありながら土器様相は北側に隣接する茨城県や栃木県と同じ東関東系の土器群として括られる特徴を持つ、口縁部及び胴部に附加条縄文が施文される土器群が主体的に分布するようになり、器種組成もそれまでの壺と甕からほぼ甕一色になってしまう。また、後期初頭段階では複合口縁で頸部にスリット手法による縦区画充填櫛描波状文・横走文が施文され、胴部に撚糸文や附加条縄文が施文される大崎台式が広く分布する（21～24）。

印西地域（印西市・白井市）では、弥生時代中期後葉の遺跡はごく少数が確認できるに過ぎない。一ヶ所は宮ノ台式期の住居跡が一軒確認された印西市松崎に所在する中郷遺跡（第一地点）[7]、もう一ヶ所は磨製の抉入片刃石斧が採集された白井市平塚の海老内台遺跡[8]で、後者は周辺に宮ノ台式期の集落遺跡の存在が推定できる程度である。神崎川を挟んで対岸の八千代市域では田原窪遺跡や上高野白幡遺跡といった環濠集落も検出され、地域の開発拠点ともなる遺跡があったことを示唆しているのとは反対に、印西地域は過疎的な地域であったのだろうか。後期に入ると印旛沼南岸を中心とした台地上に多くの遺跡が分布するようになり、印西地域でも集落遺跡や埋葬遺跡（土器棺墓）が確認されるようになる。

二　印西市向辺田遺跡出土土器

次に、筆者が注目した印西市向辺田遺跡出土土器について確認する。向辺田遺跡は印西市造谷及び荒野に所在する。平成の合併以前、造谷は印旛村、荒野は本埜村に属していた。立地は南流して印旛沼に注ぐ師戸川及び師戸川の支流が開析した南向きの左岸台地上である（図2）。発掘調査は千葉ニュータウン関連の開発事業に伴う事前調査として平成七・八年度に（財）千葉県教育振興財団により実施された[9]。

弥生時代の遺構は、師戸川に面した台地端部から住居跡が一二軒検出されている。重複関係は無い。時期の詳細については後述するが、中期末葉から後期中葉段階と考えられる。

住居跡出土土器の特徴は大きく三つに分類することが可能である。一つ目は素口縁で器面全体に撚糸文が施文される土器が主体をなす一群で、ＳＩ〇四八・〇六五の二軒が該当する。二つ目は頸部にスリット手法による縦区画充填櫛描波状文・横走文が施文される後期初頭から後期前葉の大崎台式等、筆者の第Ｉ期に位置付けられる特徴を持つ一群で、ＳＩ〇五〇・〇五二・〇六四の三軒が該当する。三つ目は素口縁で胴部が丸みを帯びた器形となり、頸部は櫛描文が消失して胴部に附加条縄文が施文される一群で、ＳＩ

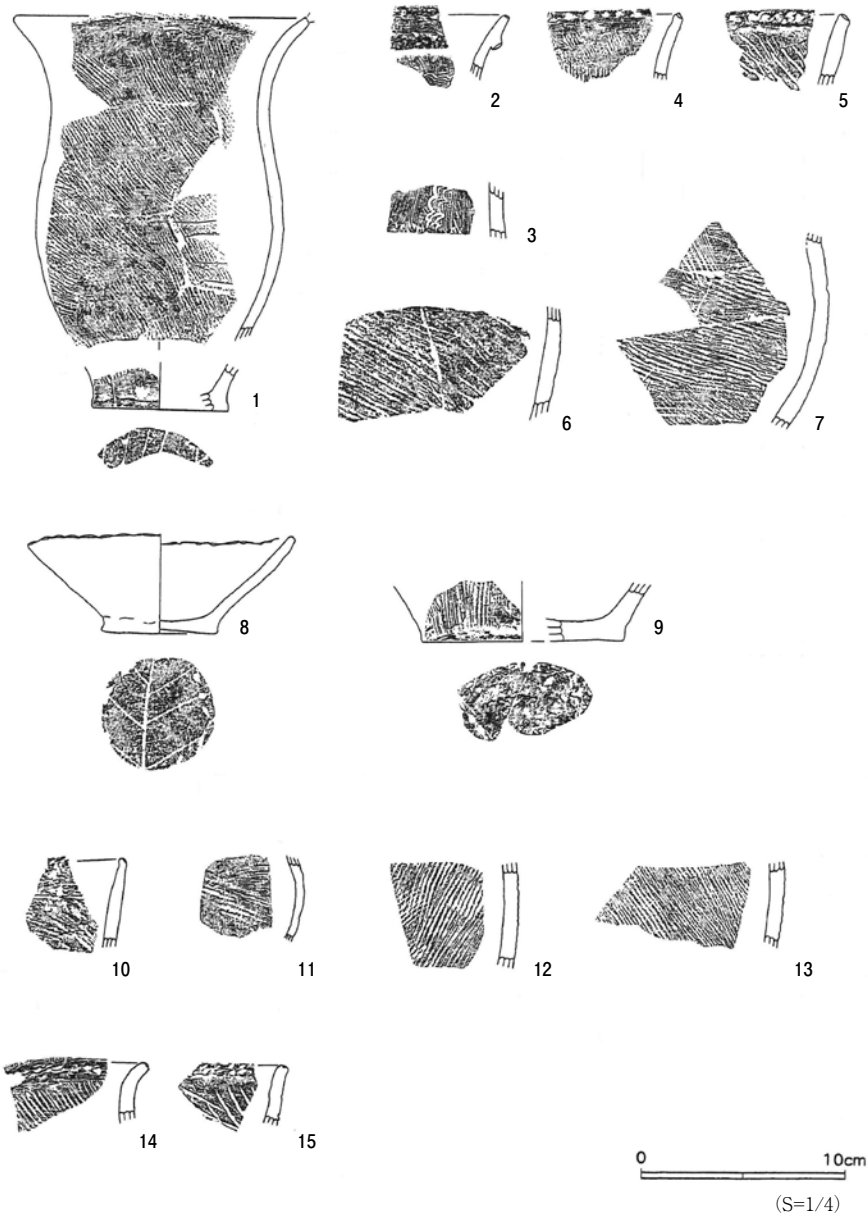
1 向辺田　2 萩原株木　3 八木宇廣　4 高岡大福寺　5 六崎大崎台
6 江原台　7 臼井南（石神Ⅰ）8 上高野白幡　9 栗谷　10 田原窪　11 中郷

図２　向辺田遺跡と関連遺跡（1/20 万　千葉）

○四九・○五一・○五三・○六一・○六八の五軒が該当する。大崎台式等よりも新しい後期中葉を中心とした時期と考えられる。この他、土器の出土数が僅少で時期的な位置付けが難しいＳＩ○五九・○六○がある。

出土土器は破片資料が多く、報告書では床面出土と覆土中出土の区別や再検証ができない資料も含まれるため、同一住居跡出土資料でも一部この分類に当てはまらない組み合わせも見られるが、概ねこの三分類に当てはめることが可能で、これらをⅠ群、Ⅱ群、Ⅲ群と分類する。

今回分類できた三群のうち、特に注目するのがⅠ群土器である。二軒の住居跡のうちＳＩ○四八出土土器が最もまとまっている（図３）。ＳＩ○四八出土土器のうち、出土位置が捕捉されているのは１の甕と８の鉢のみで、両者は共に床面付近から出土している。１の甕は素口縁で口縁部径の方が胴部径よりも大きい。口唇部には撚糸文が粗く施文されている。この土器の最大の特徴は、口縁部～底部まで撚糸文（Ｌ）が全面に施文されることである。また、遺物を実見した結果、別個体として報告されている底部は文様構成、縄文原体、色調、胎土の共通性から同一個体と考えられるため、全体を復元して図示した。口縁部～底部まで器形全体が把握可能で、口径一四、三センチメートル、器高一九、六センチメートルとなる。８の鉢については、下総地



1～9：SI048　　10～13：SI065　　14・15：遺構外

図３　向辺田Ⅰ群土器（向辺田式）

域では器種としての鉢の存在が僅少であるため、器種組成への関与の仕方や器形の変化の方向性が十分把握できていないことから共伴関係は確定できても詳細な検討を加えることは難しい状況にある。[10] 4及び5は口縁部片で、両者共に口唇部は1とは異なり原体の押捺による刻み目となっているが、口縁部以下の施文は撚糸文が斜位に施文されていることから1と同じ文様構成となろう。6・7は胴部、9は底部でいずれも撚糸文が施文されており、破片資料であるため断定はできないが1と同じ文様構成になると推定される。出土位置は明確でない。2・3は同一個体で、複合口縁で頸部にスリット手法による縦区画充填櫛描波状文・横走文もしくは縦区画の文様構成が展開すると考えられる破片だが、出土位置は明確でない。

こうした出土状況から、SI〇四八出土土器は口縁部～底部にかけて全面に斜位に撚糸文が施文される資料が主体となっていることが確認でき、SI〇六五も同様である。なお、SI〇四八からは土器の他に土製勾玉、土版、メノウ製剥片、砂岩製砥石が出土している。

以上のような特徴から、向辺田I群は、素口縁で器面全面に撚糸文が施文されるという特徴を有する甕により組成されることが確認できた。胴部に撚糸文が施文される土器が出土する住居跡にはスリット手法による縦区画充填櫛描波状文・横走文が施文される土器を伴わない住居跡とスリット手法による縦区画充填櫛描波状文・横走文が施文される土器を伴う住居跡が存在するが、I群土器のみを出土する住居跡が複数確認できることから、偶然櫛描文が施文される資料が組成しないのではなく、櫛描文を伴わない一群が存在するものとして分離することとした。

写真　向辺田遺跡 SI048 出土土器
（千葉県教育委員会保管）

三　向辺田I群土器の位置付け

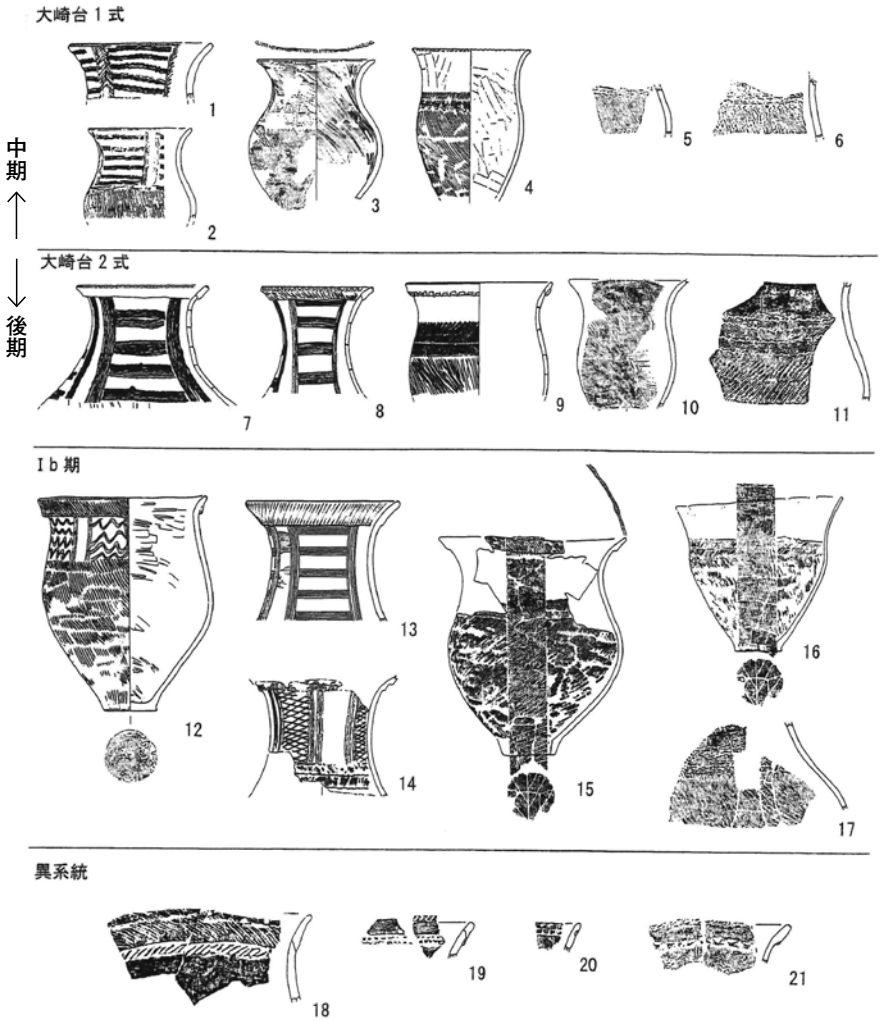
次に、この向辺田I群土器の位置付けを考察するが、その前にまず印旛沼周辺地域における中期末葉から後期初頭

段階の土器様相について確認しておく。流れとしては先述したとおり南関東系から東関東系への転換である。向辺田Ⅰ群土器は胴部全面に撚糸文が施文されることから、無文の甕である宮ノ台式からの系譜ではなく、胴部に撚糸文や附加条縄文が施文される東関東系の系譜を引くことは理解できよう。そして、中期から後期への転換の中で、器種組成が細頸壺と甕からほぼ甕に統一されていくという流れであることから、その移行期である中期末葉～後期初頭の幅の中に収まることはこれまでの編年研究から間違いないものと考えられる。

次に中期末葉と後期の区分について確認する。筆者はこれまで「茨城県の中期から後期への展開を単純化すれば、県北方面では「足洗式」から「東中根式」への移行プロセス（「基本組成」としての長頸壺・広口壺・甕などの器種による組合せから、広口壺など同じ器種における「精製土器様式」と「粗製土器様式」弁別と容量別との組合せへの移行状態の把握と分析）の解明がその課題である」[11]との鈴木正博の見解に従っていた。そのため、広口壺・甕による器種組成となる「大崎台式（小玉・小林による大崎台一式を含む）」以降を後期初頭としてずっと捉えてきた。向辺田Ⅰ群は、長頸壺（細頸壺）は組成に関与せず、出土しているのは甕のみであることから、これまでの筆者の見解では後期初頭ということとなる。小玉は大崎台一式を中期末葉に位置付けており、中期末葉か後期初頭かという視点で異なる見解であった。

これらの前提をもとに中期末葉～後期初頭の向辺田Ⅰ群がどの段階に位置付けられるのかを改めて検討する。筆者は中期末葉～後期初頭への移行期について、課題の指摘や後期へと続く文様の検討を行ったのみで編年を提示したことがないことから[12]、口縁部変化の方向性や新出資料を加えて系統的な整理を行った小林[13]の編年図（図4）を参照しながら行う。

小林の編年では、細頸壺と甕により器種組成される土器群終焉後、印旛沼周辺を含む下総地域では素口縁でスリット手法による縦区画充填櫛描波状文・横走文が施文され、胴部に撚糸文が施文される大崎台一式が展開する。続いて、頸部の文様は共通するが、口縁部が複合口縁化する大崎台二式に型式変化し、小林や小玉は大崎台二式以降を後期とする[14]。続いて次の段階になると、口縁部は同じ複合口縁でありながら幅が広がり段部も明瞭化する土器群へと変化し、胴部の縄文に撚糸文に加えて附加条縄文が定着する。そして、図示はされていないが、更にこの次の段階になると印旛沼南岸で頸部に輪積痕を残す臼井南式が成立するという流れである。



1・6：高岡大福寺遺跡71号住居址　2・5：高岡大福寺遺跡40号住居址　3：岩名町前遺跡8号住居跡
4：海隣寺於茶屋遺跡第9号住居址　7～9：大崎台遺跡201号住居址　10：向辺田遺跡SI048
11：大崎台遺跡268号住居址　12：栗谷遺跡A057　13：江原台遺跡Y－12号住居跡
14・15：八木宇廣遺跡2号住居跡　16・17：八木宇廣遺跡3号住居跡　18：大崎台遺跡268号住居址
19：鏑木諏訪尾余遺跡Y－1　20：松崎Ⅳ遺跡第3号住居跡　21：間見穴遺跡SB026住

（小林 2014 を一部改変）

図４　小林嵩による弥生時代中期末葉～後期初頭の編年案

こうした流れの中で、向辺田Ⅰ群は果たして何処に位置付けられるのであろうか。

一つ目の着目点は素口縁を呈することである。これまでの編年研究に照らし合わせると土器の新旧が素口縁から複合口縁へという流れであることから、まずは複合口縁を呈する大崎台二式よりも遡ると捉えられる。

二つ目の着目点は器面全面に撚糸文が施文されることである。[15] 印旛沼周辺地域の甕の特徴は頸部が無文であっても有文であっても、原則として頸部と胴部が明確に区画・区別されることが挙げられる。小林による編年図を参照しても10の向辺田例以外は全て頸部と胴部が区画・区別されていることがわかる。また、頸部と胴部との境界が櫛描文やS字状結節文で区画される資料は、筆者が観察した資料ではその殆どがまず胴部に附加条縄文や撚糸文等を施文した後、頸部と胴部を区画する施文を行い、その後、頸部の文様が施文されるという順序が文様の切り合い関係から確認できるのである。この点、向辺田Ⅰ群は頸部と胴部を区別せずに全面に撚糸文を施文するということで一般的な特徴から逸脱していることが理解できる。

そこで次に器面全面に撚糸文が施文される土器の類例を確認する。先行研究として、根本岳史は印旛沼周辺地域における撚糸文土器を集成し、器面全面に撚糸文が施文される土器の事例を既に複数例確認している。[16] 根本の集成によると、器面全面に撚糸文が施文される土器は印旛沼南岸の六崎大崎台遺跡で最も多く出土しているが、出土状況を確認したところ、口縁部～胴中央部まで遺存する資料が出土している一八四号住居跡は、出土遺物の主体は宮ノ台式で、器面全面に撚糸文が施文される土器は出土位置の記録が未記載であった。他の撚糸文が器面全面に施文される土器が出土している住居跡の時期については、一四四号・一五五号・一六二号・二五六号・三六八号の各住居跡が宮ノ台式期、一五四号・二二七号住居跡等は後期初頭であることが確認できたが、いずれも先述した一八四号住居跡と同様に出土位置が床面上でない等、土器組成を捉えるには条件が悪い。六崎大崎台遺跡は、調査面積も広大だが、検出された遺構の総数が五七〇軒以上で弥生時代から平安時代までの各時代の住居跡が多数あること、遺構間の切合関係も激しく弥生時代に限っても中期後葉・末葉と後期の両時期の住居跡があることから、遺構出土土器の組成を捉えるには遺構の切合関係がない向辺田遺跡出土土器の方が正確に把握できるものと考える。

四　向辺田式の設定

最後に、撚糸文が施文される土器が一つの土器型式とし

て独立できるかどうか検討する。撚糸文土器を集成した根本は「いずれの時期とも、遺跡全体の出土遺物に対する比率はきわめて低い。」、「撚糸文はあくまでも土器を構成する一要素に過ぎず、その変遷から土器型式の総体を捉えることはできない。[17]」と述べているが、果たしてそうであろうか。

今般、向辺田遺跡出土土器の分類を実施した結果、向辺田Ⅰ群は、住居跡出土土器の主体が撚糸文であると確認できたのである。筆者は、後期中葉段階で設定した栗谷式土器について、印旛沼西岸地域に南関東系土器群が浸透してくる中で成立した臼井南式とは異なる特徴を持つ南関東系と東関東系の折衷形態であると捉えている。現状、胴部が複段構成でその中央にS字状結節文を有する栗谷式と全く同じ特徴を有する土器は栗谷遺跡以外では確認できておらず、地域的な広がりも確認できないことから栗谷式の存在自体を疑問視する意見もあろう。

これは土器型式の認識の仕方の違いにも起因するが、弥生時代中期末葉から後期段階においては、大枠としての時間軸の流れはありつつも、土器様相の一つのまとまりが局所的に、モザイク的に出現するという実態を評価すべきと考えている。向辺田Ⅰ群も、モザイク的に出現した極狭い範囲に分布する土器のまとまりとして捉えておきたい。

この考えは、黒沢浩による神奈川県横浜市二ツ池遺跡出土土器を基準とする後期の二ツ池式の捉え方である「別に一定の広がりを持たなくても僕は型式として成り立つと考えています。」、「現実に型式として分離出来るものであればいくつドットが落ちても僕は全く構わないと思っています。[18]」との考え方に近いかもしれない。

ただし、こうした小地域の土器型式の分立は地域全体の土器様相の把握や変遷を大掴みしようとする際には説明が難しくなるため、「段階設定」や「様式的把握」も必要になってくる。こうした大枠的な流れを認識しつつも、細別として小地域の動向を理解する際に向辺田Ⅰ群のような単位の設定は有効な手段となるのではないだろうか。

以上の検討結果から、筆者は向辺田SI〇四八出土土器を基準とする向辺田Ⅰ群土器について、頸部と胴部の境界を必ずといっていいほど明確に区画・区分している下総地域の土器群からは逸脱した特徴を有していること、大崎台二式以前でありながら、頸部にスリット手法による縦区画充填櫛描波状文・横走文が施文されず、器面全面に撚糸文が施文される土器のみで組成される一群であることから、一つの土器型式として独立させることがよいものと捉え、ここに向辺田式を設定する。[19]

編年的位置付けは、広口壺・甕による器種組成であることから、細頸壺・甕による器種組成となる阿玉台北式より

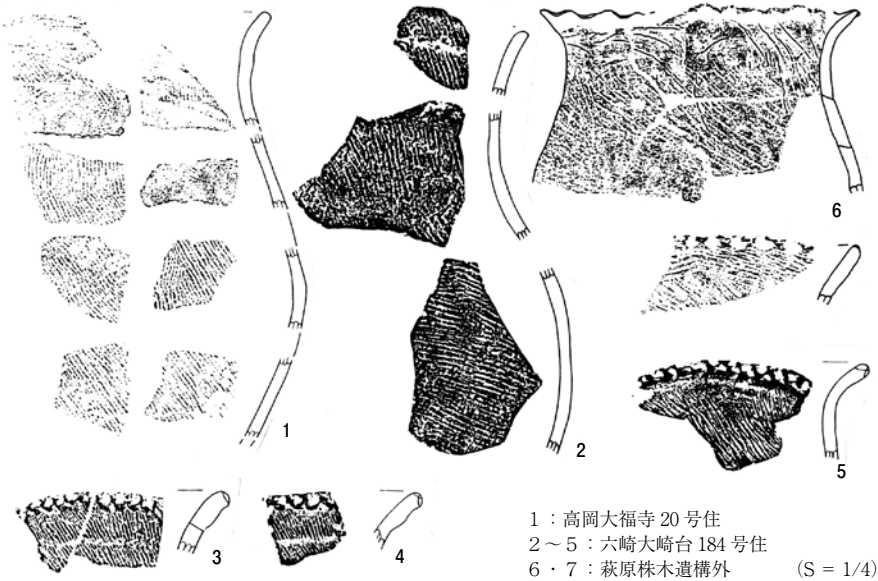


図５　向辺田式及び類似する文様構成を持つ土器

新しく、複合口縁で頸部にスリット手法による縦区画充填櫛描横走波状文・横走文が施文される大崎台二式以前となろう。甕であるため大崎台一式に伴う甕とする見解もあろうが、先述のとおり組成に違いを認め、大崎台一式と略並行するものと捉えておく。

小林は向辺田ＳＩ〇四八出土土器を、幅の狭い複合口縁の口縁部片と撚糸文が施文されている胴部片が出土している状況を鑑み、大崎台二式期に位置付けている[20]が、編年図で示した佐倉市海隣寺於茶屋遺跡第九号住居址出土土器（図４の４）は素口縁で口径が胴部径を上回り細身となる器形であり、文様構成以外は向辺田ＳＩ〇四八と共通する特徴であることから両者に時期差を認める必要性に疑問を感じるのである。

なお、筆者はこれまで大崎台一式期を後期初頭と捉えていたが、先述した中期末葉と後期初頭の区分の議論、遺構出土土器の位置付けの検討から、出土遺構によっては後期初頭よりも遡る時期に広口壺・甕による器種組成となる一群の存在も認められるという認識に訂正したい。但し、向辺田式は中期末葉に付けられるものとするが、小林も大崎台一式期について「大崎台一式が宮ノ台式に併行するか、久ヶ原式に併行するかは、市原市椎津茶ノ木遺跡の一二三号遺構の評価を含め、今後の資料の増加を俟って判断した

い。[21]」とも述べているように、位置付けは今後も慎重に検討する必要があろう。

最後に類例と系譜について触れる（図5）。向辺田ＳＩ〇四八出土土器について「これまでの型式の枠組みの中では捉えられない土器」と先述したとおり類例は極めて限定される。口縁部～胴下部まで遺存しているのは根本も例示した佐倉市高岡大福寺遺跡第二〇号住居跡[22]や六崎大崎台遺跡一八四号住居跡出土例程度で、他には印西市萩原株木遺跡遺構外出土土器[23]が該当する。また、こうした諸例から口頸部に撚糸文が施文されていることより器面全面に撚糸文が施文されることが推測され、向辺田式又は向辺田式と類似する文様構成が展開すると推測される破片資料が複数の遺跡で確認できる。

系譜については、素口縁で縄文が撚糸文であることから足洗式や阿玉台北式から連なるものと推定されるが、撚糸文が全面に施文される土器の萌芽を示すような資料は確認できておらず、向辺田式直前の土器群は明確でない。

まとめ

印旛沼北岸に展開した小規模な集落遺跡である向辺田遺跡出土土器の分析を通して、弥生時代中期末葉に位置付けられる向辺田式を設定した。冒頭に記したとおり印旛沼周辺を含む下総地域の弥生時代中期末葉から後期の土器群の系統把握や変遷をまとめることは非常に困難を伴う。

土器様相の変化は下総地域だけではなく広域で同時に起こっていることから、近年ではその背景に寒冷化という気候変動を挙げる論考も出されている[24]。原則、土器の変化は土器から導き出すものではあるが、社会の変化を総括的に評価するには幅広い視点・アプローチから真相に迫ることも必要であろう。

今般設定した向辺田式の設定がその整理や解明に半歩でも前進することに繋がればと考える次第である。

本稿の執筆に際しては、資料調査において千葉県教育庁教育振興部文化財課、印西市教育委員会、大谷弘幸・大関枝美子・鈴木圭一・能勢幸枝の各機関・各氏からご協力をいただきました。又、小玉秀成及び小林嵩の両氏からは、向辺田遺跡出土土器の捉え方についてコメント・御教示をいただきました。末筆ではありますが謝意を表します。

（註）

1　髙花宏行「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の土器の変遷について」（『奈和』第三七号、一九九九年）。

2　小林嵩「下総の弥生時代後期土器編年」（『千葉大学文学部考古学研究室　考古学論攷Ⅱ―柳澤清一先生退職とともに―』、

二〇一五年）。

3 小玉秀成「臼井南式土器の変遷について」（『南関東の弥生土器二～後期土器を考える～』、二〇〇九年）。

4 高花宏行「臼井南遺跡群出土弥生土器の再評価」（『佐倉市史研究』第一四号、二〇〇一年）。

5 高花宏行「「臼井南式」の枠組みと「栗谷式」」（『シンポジウム「印旛沼周辺の弥生土器」予稿集』、二〇〇六年）、高花宏行「「臼井南式」と周辺土器様相の検討」（（財）印旛郡市文化財センター研究紀要）五、二〇〇七年）。

6 小林嵩「足洗式・阿玉台北式の再検討と文化的特質」（『籾』第一〇号記念号、二〇二一年）。

7 日暮冬樹『平成一七～平成二四年度印西市内遺跡発掘調査報告書』（印西市教育委員会、二〇一四年）。

8 鈴木普二男「四　農耕生産性の一端を覗く　平塚の抉入り片刃石斧」（『白井町の文化誌』、一九七九年）。

9 田形孝一他『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸＩ―印旛村向辺田遺跡―』（（財）千葉県教育振興財団、二〇〇九年）。

10 鉢について、小玉秀成氏より中期末葉から後期前半に特徴的な遺物との御教示をいただいた。今後、検討したい。

11 鈴木正博「栃木「先史土器」研究の課題（三）―「宮ノ台式縁辺文化」としての「富士前式」制定とその意義―」『婆良岐阜考古』第二一号、一九九九年）。

12 高花宏行「下総地域における弥生後期土器の成立を巡る現状と課題」（『（財）印旛郡市文化財センター研究紀要』三、二〇〇四年）、高花宏行「印旛沼周辺地域における中期末葉から後期初頭の様相」（『南関東の弥生土器二～後期土器を考える～』、二〇〇九年）。

13 小林嵩「下総における弥生時代中期後半～後期初頭土器編年の再検討」（『古代』第一三三号、二〇一四年）、小林嵩「弥生時代中期～後期への移行期の様相―下総―」（『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』、二〇一五年）。

14 註13（小林二〇一五年）。

15 小玉秀成氏より、斜位の非常に細かい撚糸文について、宮ノ台式の甕のハケの置き換えではないかとのコメントをいただいた。

16 根本岳史「弥生時代後期初頭の撚糸文施文土器について～印旛沼周辺地域を中心として～」（『（財）印旛郡市文化財センター研究紀要』七、二〇一〇年）。図示された資料の中には、報告書の記載では「撚糸文」となっているが実際には「附加条縄文」等が施文されている資料があることに留意が必要である。

17 註16（根本二〇一〇年）。

18 黒沢浩「第Ⅲ部　シンポジウム討議記録」（『南関東の弥生土器』、二〇〇五年）一五八・一五九頁。

19 口唇部の施文については、原体の回転による施文の他に、向辺田ＳＩ〇四八の四・五のような縄文原体の押捺による刻み目となるものも含める。

20 小林嵩氏の御教示による。

21 註13（小林二〇一五年）。

22 但し、高岡大福寺遺跡第二〇号住居跡出土資料は接合しない破片資料を図上で復元したものである。

23 野村優子『千葉県印旛郡印旛村萩原株木遺跡』（（財）印旛郡市文化財センター、二〇〇〇年）。図５の６は器面全面に撚糸文が施文されると考えられるが、口唇部が上方からの交互押捺による小波状となり、より後期的な特徴を有している。また、同資料は報告書では施文が「櫛描沈線文」となっているが、実見の結果、施文が「撚糸文」であることを確認した。

24 小橋健司「気候変動と房総の弥生社会―東京湾東岸から見た弥生時代後期―」（『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』、二〇一五年）。

【講演録】

令和四年度市史編さん講演会

瓦塔（がとう）から探る古代・印旛郡の仏教文化

池田敏宏

一　はじめに―自己紹介、報告の契機―

今回は自分で自己紹介をしながら、なぜ私がこの場に立って瓦塔の話をするか、また、瓦塔以外の仏教系遺物の話をするかということに入っていきます。

さて、私は駒澤大学仏教学部を卒業しています。考古学専攻ではありませんでしたが、東京都多摩地域、埼玉県北部などのいろいろな発掘現場でお世話になり、叩き上げで考古学を学んで何とかここまで来ました。大学卒業後、財団法人栃木県文化振興事業団調査部に入りました。その後、この財団は何回か組織改編があり、現在の名称は公益財団法人とちぎ未来づくり財団となっています。そこの埋蔵文化財センターで約三〇年余り勤務していましたが、本年、色々と考えるところがあり、退職しました。

現在、高野山大学大学院生（通信教育課程）として真言密教を学んでいます。一方、千葉県富里市の民間調査組織、株式会社勾玉工房から「若い職員たちの指導役をしていただけないか」という話があり、今年の七月からお世話になっています。これに伴って転居し、千葉県民となっています。

さて、私は仏教考古学が専門で、仏塔＝ストゥーパ信仰史を調べています。もう一つ、仏教史学としては、平安時代初めの頃の仏教（空海や最澄が生きていた頃の仏教）、もしくはそれ以前の奈良時代仏教に興味があり、学生以来、三〇数年研究を続けています。

二　瓦塔概説

瓦塔とは何か　まず初めにストゥーパの話をします。ストゥーパは横から見ると、土饅頭、古墳のような形をして

います。ただし、古墳と違って土ではなくレンガで作られています。仏教の教えをお説きになられた、お釈迦様の舎利（仏教の世界では遺骨とは言わない）を納める空間がストゥーパでした。インドから中国、中国から朝鮮・日本に伝わってくる間にだんだんと形を変えて、三重塔や五重塔、七重塔になっていくわけです。

ところで、ストゥーパを音で漢訳（音訳）すると、卒塔婆（そとうば、そとば）となります。この「卒」の字を無くして「塔婆」と呼び、さらに「婆」の字を略して「塔」という言葉が生まれました。ただ、いずれにせよ、日本や朝鮮・中国で作られる多層塔形式の塔が、お釈迦様の舎利を安置する空間であることは変わりありません。

次に瓦塔の簡単な説明をしましょう。

A　瓦塔とは何か

（一）―一　瓦塔＝一般的には、瓦製仏塔の略称　瓦塔とは、一般的には、瓦製仏塔の略称です。研究の歴史の中では、古い言い方として、瓦製塔婆と呼ばれた時期もありました。私は一般的な説明の時は分かりやすいので、「瓦製仏塔の略称が瓦塔だ」と言うようにしています。いずれにしろ、瓦塔というのは「焼きもの」の塔なのですが、厄介な問題が一つあります。

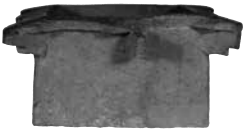
（一）―二　瓦塔＝瓦製仏塔（瓦塔）と瓦製小堂（瓦堂）の総称として用いることもある　瓦製仏塔と瓦製小堂をまとめて瓦塔と呼称する場合も、あります。千葉県の例でいうと、千葉市谷津遺跡で出土・全景復元された塔形（瓦塔）とお堂形（瓦堂）をあげることができます。瓦塔の研究は戦前からなされていますが、一九八〇年代くらいから瓦塔・瓦堂の総称として「瓦塔」と呼ぶことが多くなってきました。書き物によっては混同されていることがあるので注意が必要です。

（二）粘土を素材とした焼き物である。

（三）屋根と軸部（壁体）を積み木細工のように組み立てる　瓦塔は、木造塔の細部意匠をまね、各パーツを図1のようにばらばらに作ります。そしてこれらを積み木細工のように組み立てながら五重塔形にしていきます。

（四）総高は二～一メートルほど　印西市木下交流の杜歴史資料センターに展示されている馬込遺跡出土瓦塔は七重塔ですが、通常は五重塔がポピュラーです。なお、五重塔サイズだと、酸化焔焼成（赤い焼き物）タイプだと総高は一メートルほどです。一方、還元焔焼成（青い焼き物）タイプだと、私の背丈よりも高い二メートルのものがあります。代表例としては、東京上野の国立博物館に展示されている東村山市出土瓦塔をあげることが出来ます。なお、還元焔焼成タ

①水煙

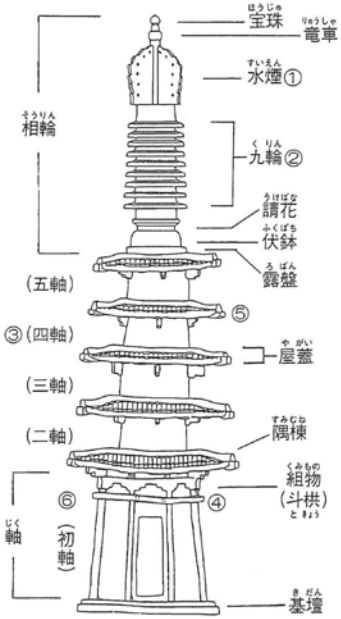


③四軸部

②九輪

④初軸部斗栱

⑤屋蓋部（上：表　下：裏）



⑥初軸部

図１－１　瓦塔部分名称図

（写真：埼玉県教育委員会提供、図：埼玉県立歴史資料館 1994 より転載）

①屋蓋部（上：上から　下：正面から）

②鴟尾

③初軸部斗栱

④初軸部（上：正面、下：側面）

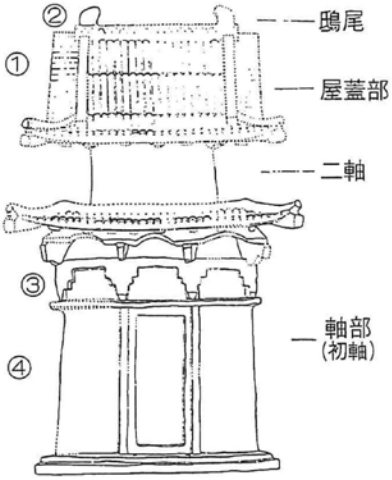


図１－２　瓦堂部分名称図

（写真：埼玉県教育委員会提供、

図：埼玉県立歴史資料館 1994 より転載）

イプの瓦塔は八世紀頃、酸化焔焼成タイプ瓦塔は九世紀頃に位置付けられます。

（五）瓦塔の全国的傾向　「主な瓦塔出土地分布図」（図２）をご覧ください。瓦塔は、現在までに全国で約四八〇例が知られています。

内訳をみると、関東地方が約五八パーセント、北陸～甲信地方で約一五パーセント、東海地方で約一四パーセント、西日本で約九パーセント、東北地方で約四パーセントとなっています。いかに関東地方に瓦塔が多いかが分かります。また、瓦塔という遺物を考える際、関東地方を中心に考察していくのが良いようです。

B　瓦塔が出土する遺跡の性格

（一）伽藍寺院跡や小堂宇（いわゆる単一堂宇寺院）

ここでは、瓦塔が出土する遺跡の性格について、関東地方の事例に限定してお話をしていきましょう。一つ目は、伽藍寺院で出土するケースをあげましょう。印西市の木下別所廃寺で八世紀代の瓦塔が出土しています。あと、栄町の龍角寺でも瓦塔が出土しています。ちなみに、七堂伽藍が整っていない単一堂宇寺院での瓦塔出土も、このケースに含みます。本物の木造塔の代わりに瓦塔が造立されたと考えられます。[1]

図２　主な瓦塔出土地分布図
（埼玉県立歴史資料館 1994 より転載）

（二）ムラの仏堂施設や山寺　次にムラの中のお堂（仏堂施設）から出土するケースです。この場合、瓦塔そのものが信仰対象となっていたようで、覆い堂の中に瓦塔を奉納・安置していました。関東地方では、このケースが一番多いです。

（三）集落　第三のケースとしては、竪穴建物跡や井戸跡から瓦塔が一点～数点のみ出土するケースです（他の仏教系遺物や仏堂施設を伴わないで）。結論を申せば、これは、おまじないです。今日のお題とは違う方向にいってしまうので、割愛させて頂きます。

（四）生産遺跡　第四のケースです。窯跡から出土するケースが多いです。窯跡以外ですと、小さな焼成土坑で瓦塔を作っていると言う考えもあります。今日の話からずれますので、生産遺跡の話は、ここで割愛させて頂きます。

（五）聖地からの出土　例えば埼玉県の秩父山中・多武峰（標高約三五八m）では、尾根付近に瓦塔を建てています（瓦塔を安置するための覆い堂があるかどうかは発掘調査がされていないので分かりません）。ちなみに、（一）最初から山が礼拝対象や聖地だったから瓦塔が建立されたのか、（二）瓦塔を建立したことで、その場が聖地化・信仰対象となっていったのかはまだまだ検討中です。

C　瓦塔が建てられた背景

ここでは古代の仏塔造立意趣の変遷や、瓦塔のモデル・チェンジの背景をみてみましょう。

古代の仏塔信仰を考える際、二つの段階が設定できます。一つ目は、七世紀後半から八世紀中葉にかけての段階、二つ目は八世紀後半から一〇世紀初めにかけての段階です。

木造塔は、塔の中心部に心柱が通っています。ちなみに、お釈迦様の舎利を納めた施設が塔ですから、この心柱の一番上（相輪部）か、一番下（礎石下）に、舎利を安置することになっていました。ただし、瓦塔で舎利が見つかった事例は、現在のところありません。古い瓦塔であれば、心柱の最下部に安置したということがあっても面白いと思います。今後の成果に期待したいところです。

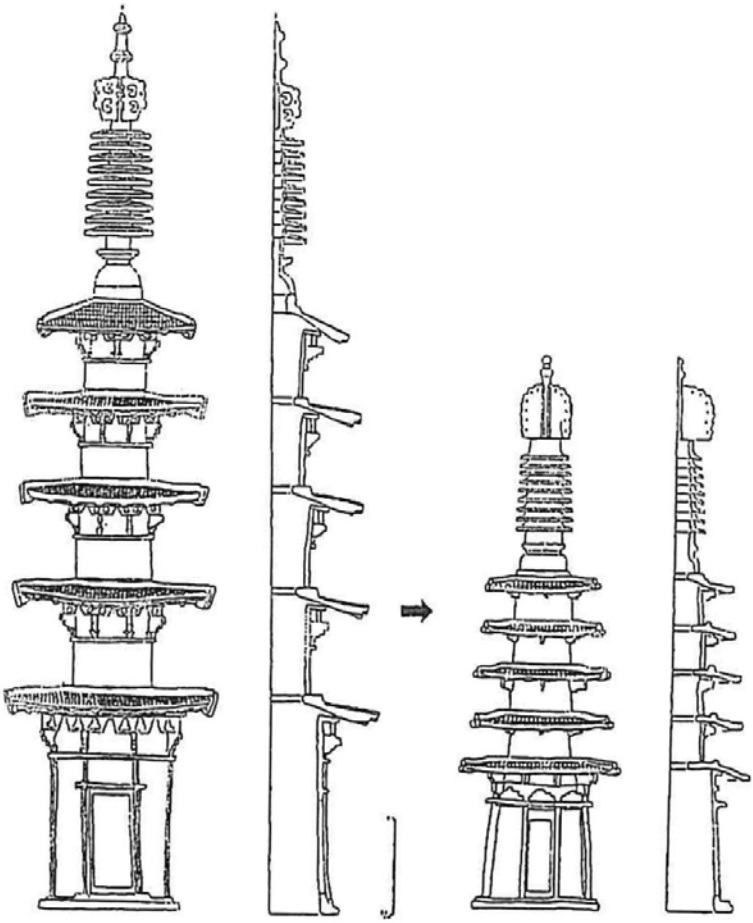
次に、この時期の造塔理由をみてみると、自分の父や母、先祖のためや、亡き方々の回向のために塔を建立する例が目立ちます。

一方、八世紀以降、塔の中にお経（法舎利）を納めるケースが増えてきます。とりわけ、顕教経典よりも、密教経典のほうが、おまじないの効果が高いと言われています。なかには、百万小塔のように、陀羅尼の部分＝おまじないの経文だけを塔の中に収める事例も現れました。

８世紀前葉頃に瓦塔出現

８世紀代の瓦塔の特徴
形状　屋蓋部表現　瓦継ぎ目表現が多い
　　垂木表現　　二軒構成
　　斗栱表現　　木造塔を意識した斗栱部表現
焼成　還元焔焼成（須恵質）
色調　青みがかった灰色

８世紀末葉～９世紀初頭頃、瓦塔のモデル・チェンジ
＝瓦塔の持つ意味合い（表象）の変換を示す
９世紀代の瓦塔の特徴
→瓦継ぎ目表現は軒先先端の一つのみ
→一軒構成
→簡略化した斗栱部表現
→酸化焔焼成（土師質）
→黄色がかった橙色



木造塔模倣タイプ（８世紀代）
（例）東村山市 No. ２遺跡瓦塔（今泉ほか 1997）

仏塔形表象タイプ（９世紀代）
（例）東山遺跡瓦塔（今泉ほか 1993）

図３　関東地方における瓦塔変遷モデル（池田 2004 より転載）

ちょうど、この時期、瓦塔も大きく変化します。

「関東地方における瓦塔変遷モデル」（図3）をご覧頂きながら話を聞いて下さい。木造塔をまねたタイプ（還元焔焼成）の瓦塔から、塔のエッセンスのみを抽出したタイプ（酸化焔焼成）へと変化します。それは、本物の木造塔を建てる代わりに瓦塔を建てていた段階＝祖霊供養の意識から、瓦塔そのものが信仰の対象と変化したことをシンボライズしている（モデル・チェンジが行われた）と私は考えております（池田二〇〇五）。

三　千葉県域における瓦塔の出土傾向

（一）千葉県の出土数　次に千葉県域の瓦塔について概説します。私が二〇〇四年に瓦塔出土一覧表を作った時は千葉県の瓦塔は四〇数例でした。ところが、二〇年たって調べ直してみると六〇例に達しました（図4）。発掘調査でいろいろな所で瓦塔が出土していますので、二〇年くらい間を置くとここまで数が増えます。ちなみに二〇〇四年のデータですが、埼玉県は六〇数例、群馬県は七〇数例ありました。その後、瓦塔出土例は増えていますから、おそらく現在は、群馬は八〇例くらい、埼玉県は七〇例くらいまで行っていると思います。

でも、そもそも瓦塔の出土傾向が低い地域ですと、いくら調査数が増えても、瓦塔の出土事例は、なかなか増えません。例えば、京都府は二〇〇四年のデータで一例です。近年、ようやく二例目が出土しました。少ない地域は少なく、多い地域は、やはり多い。この傾向は、あまり変わらないと思っています。

（二）八世紀初頭から中葉の出土事例　今度は、時代別の出土傾向をみましょう。八世紀初頭～中葉の瓦塔の出土事例は九例あります。例えば習志野市の谷津貝塚の瓦塔は、津田沼駅前の再開発にともなう大規模発掘調査で出土した事例です。印西市でも瓦塔の出土から何十年もたっているのに、ようやく最近日の目を見るという事例があります（山田浅間山出土瓦塔、岩戸西方出土瓦塔）。佐倉市ですと、長熊廃寺の瓦塔や、最近、発掘調査された城番塚遺跡瓦塔があったりという具合です。このように、この時期の瓦塔は、なぜか印旛～香取地域に多いのが肝要だと思っています。

（三）八世紀後葉の出土事例　八世紀後葉の事例は急に少なくなり、四例しかありません。千葉県千葉市で二例、市原市で二例です（この市原市の二例の中には萩ノ原遺跡出土瓦塔があります。最近、市原歴史博物館が開館しましたが、五重塔として復元・展示されています）。なぜか、千葉県は少ないですが、逆に埼玉方面はこの時期の瓦塔がたくさん出土しています。瓦塔の信仰が流行る地域と、流行らない

市町村	遺跡名	瓦塔類型	出土部位・点数
市川市	下総国分尼寺瓦塔	詳細不明	
	国分遺跡瓦塔	詳細不明	
習志野市	谷津 (貝塚) 遺跡瓦塔①	多武峯類型	屋蓋部片５
	谷津 (貝塚) 遺跡瓦塔②	東山 or 上西原	屋蓋部小片１, 軸部小片１
八千代市	白幡前遺跡瓦塔①②	東山類型	屋蓋部片数十点
	白幡前遺跡瓦塔①②	東山類型	屋蓋部片数十点
	白幡前遺跡瓦塔・瓦堂③	東郷台類型	瓦塔・瓦堂 屋蓋部, 軸部破片多数
	村上込の内遺跡瓦塔	東山類型	屋蓋部小片１
印西市	旧 印旛村岩戸西方出土瓦塔	多武峯類型	初重～三重の屋蓋と軸部
	旧 印旛村山田浅間山出土瓦塔	多武峯類型	屋蓋部片８, 斗栱部片２, 軸部片１ほか
	馬込遺跡瓦塔①	東山類型	瓦塔全景 (ほぼ完存)
	馬込遺跡瓦塔②	東山類型	瓦塔全景 (ほぼ完存)
	旧 印旛村井戸向遺跡	東山 or 上西原	屋蓋部小片１
	鳴神山遺跡瓦塔	東山 or 上西原	屋蓋部小片１
	木下別所廃寺瓦塔	上西原類型	屋蓋部小片６, 軸部１
	大塚前遺跡瓦塔	詳細不明	
	浦部出土瓦塔	詳細不明	
佐倉市	長熊廃寺瓦塔	多武峯類型	屋蓋部片５
	城番塚遺跡瓦塔	多武峯類型か	屋蓋部片１
	江原台遺跡瓦塔	上西原類型	屋蓋部片３, 斗栱部片１, 軸部片６
	六拾部遺跡瓦塔①	東郷台類型	屋蓋部破片, 軸部破片
	六拾部遺跡瓦塔②	東郷台類型	屋蓋部破片, 軸部破片
	六崎 (遺跡) 出土瓦塔	詳細不明	
四街道市	権現堂遺跡瓦塔	多武峯類型	屋蓋部小片１
	小屋ノ内遺跡瓦塔	詳細不明	
印旛郡栄町	龍角寺瓦塔	上西原類型	屋蓋部小片１, 軸部片２, 基壇部片１
成田市	吉倉白ヶ峰遺跡瓦塔	東山類型	屋蓋部片, 軸部片多数
	吉倉大久保遺跡瓦塔	東山類型	屋蓋部小片１
	中台遺跡瓦塔	上西原類型	屋蓋部小片１
	郷部・加良部遺跡瓦塔	上西原類型	屋蓋部小片１
	囲護台遺跡瓦塔	詳細不明	
千葉市	千葉寺跡瓦塔	勝呂類型	屋蓋部小片２
	生実城跡瓦塔	萩ノ原類型	屋蓋部片１, 初重基壇部片１
	越川戸遺跡瓦塔・瓦堂①	萩ノ原類型	瓦塔・瓦堂破片多数
	越川戸遺跡瓦塔②	上西原類型	相輪部, 屋蓋部, 斗栱部片多数
	谷津遺跡瓦塔・瓦堂	上西原類型	瓦塔・瓦堂全景 (ほぼ完存)
	葭山遺跡瓦塔	上西原類型	屋蓋部小片４
	荻生道遺跡瓦塔	詳細不明	
	黒ハギ遺跡瓦塔	詳細不明	
	辰ヶ谷遺跡瓦塔	詳細不明	
香取市 (旧 佐原市)	多田寺台遺跡瓦塔	多武峯類型	屋蓋部片数点
山武郡芝山町	庄作遺跡瓦塔	上西原類型	屋蓋部片４
	山田廃寺瓦塔	詳細不明	
山武郡横芝光町	新台遺跡瓦塔	上西原類型	屋蓋部片４, 初重軸部片３ほか
旭市	初崎遺跡瓦塔	詳細不明	
	旧 干潟町 後田遺跡瓦塔	詳細不明	
匝瑳市	旧 八日市場市 大竹台遺跡瓦塔	詳細不明	
山武市 (旧 成東町)	真行寺廃寺瓦塔	多武峯類型	屋蓋部片３, 軸部小片１
東金市	尾亭遺跡 B 地区瓦塔	詳細不明	
大網白里市	山荒久遺跡瓦塔	東山 or 上西原	屋蓋部小片１
市原市	萩ノ原遺跡瓦塔	萩ノ原類型	瓦塔全景 (ほぼ完存)
	稲荷台遺跡 (P 地点) 瓦塔	萩ノ原類型か	屋蓋部小片１
	孟地 (南青野) 遺跡瓦堂	上西原類型	瓦堂 屋蓋部破片
袖ケ浦市	遠寺原遺跡瓦塔	東山類型	屋蓋部片２
	上大城遺跡瓦堂	上西原類型	瓦堂 屋蓋部小片１
	東郷台遺跡瓦塔	東郷台類型	屋蓋部小片２, 相輪九輪部分１
木更津市	小谷遺跡瓦塔①	上西原類型	瓦塔全景 (ほぼ完存)
	小谷遺跡瓦塔②	東郷台類型	瓦塔全景 (ほぼ完存)
	丹過遺跡瓦塔	詳細不明	
南房総市	宝珠院瓦塔	類型不明	斗栱部片１点
	旧 千倉町 健田遺跡瓦塔	詳細不明	

図４　千葉県域出土瓦塔一覧（池田作成）

地域があるというのは面白い現象です。

（四）九世紀の出土事例　八世紀末葉～九世紀中葉頃、ちょうど瓦塔のモデル・チェンジが行われた時期になると、日本全国で瓦塔が造立されるようになります。

千葉県も御多分にもれません。一方、九世紀後半になると、全国で瓦塔が急激に出土しなくなります。にもかかわらず、千葉県域では、この時期の瓦塔が造立されています。この界隈は、瓦塔信仰を受け入れるのが遅かった分、九世紀後半まで残っているのでしょう。

さて、今度は参考事例として、瓦塔以外の仏教系遺物の動向をみてみましょう。「霞ケ浦沿岸地域の小仏像出土土地」と、「仏像関係一覧表」（図5・6）をご覧ください。七世紀～平安時代頃の小仏像が霞ケ浦地域や、「香取・印旛の内海」沿岸に多く分布するのがうかがえます。白鳳仏で有名な龍角寺以外にも、千葉県香取市の関峯崎三号横穴の押出三尊仏（図7）があります。七世紀後半の仏像が横穴墓の中に納められたケースです。この地域の仏教受容を考える上で非常に意義深いです。

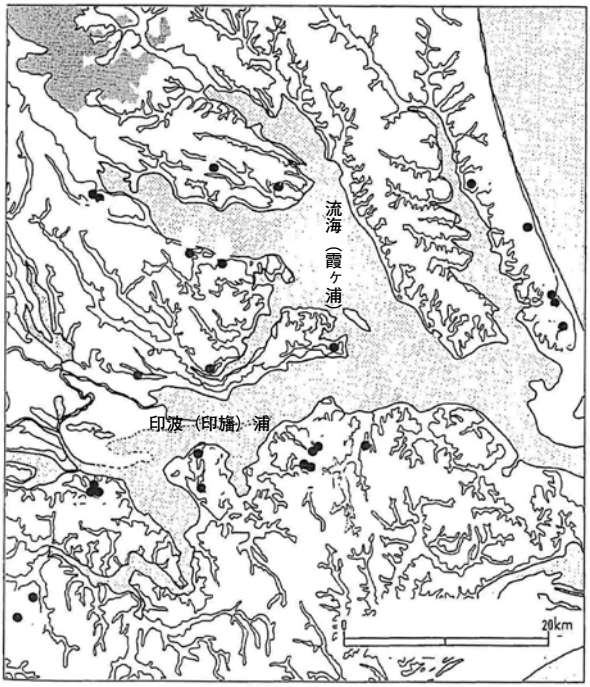


図５　霞ケ浦沿岸地域の小仏像出土土地
（上高津貝塚ふるさと歴史の広場　1998 より一部改変・転載）

遺跡名（出土地）	所在地	種類	時代
関峯崎３号横穴	千葉県佐原市	押出一光三尊像	7 世紀
竜角寺	千葉県印旛郡栄町	銅造薬師如来（仏頭）	7 世紀後半
成東町出土	千葉県山武郡成東町	銅造菩薩立像	7 世紀後半
稲荷町出土	千葉県香取郡大栄町	銅造十一面観音菩薩立像３	8 世紀
名木廃寺	千葉県香取郡下総町	銅造菩薩立像	8 ～ 9 世紀
井戸向遺跡	千葉県八千代市	銅造宝冠如来坐像	平安後期
田向城跡	千葉県山武郡芝山町	銅造宝冠如来坐像	平安後期
下総国分寺	千葉県市川市	銅造誕生釈迦仏立像	平安時代
高津新山遺跡	千葉県八千代市	銅造如来立像	平安時代
木下別所廃寺	千葉県印西市	銅造菩薩立像	平安時代
放光院跡	千葉県印旛郡栄町	銅造如来坐像	平安時代
大六天神社	千葉県印旛郡栄町	銅造菩薩立像小片	平安時代
名木廃寺	千葉県香取郡下総町	銅造神坐像	平安時代
織幡妙見堂遺跡	千葉県香取郡小見川町	銅製光背？	平安時代
坂志岡 尼ヶ岡遺跡	千葉県山武郡芝山町	銅造観音菩薩立像（鍍金）	平安時代
後沢第一遺跡	千葉県千葉市	銅造男神立像（鍍金）	平安時代
小山遺跡	千葉県千葉市	銅造男神立像（鍍金）	平安時代
満願寺	茨城県稲敷郡東村	銅造如来立像	7 世紀後半
台渡里廃寺	茨城県水戸市	仏像鋳型２	8 世紀
下君山廃寺	茨城県稲敷郡江戸崎町	銅造誕生釈迦如来立像	8 世紀
結城廃寺	茨城県結城市	阿弥陀如来坐像塼仏４・観音菩薩立像塼仏４・勢至菩薩立像塼仏９・薬師如来立像塼仏５・如来倚像塼仏・立像脚部塼仏２・如来坐像塼仏６・火頭形三尊像塼仏２（頭部･脇侍）･倚像塼仏（膝部）･脚部塼仏･大型塼仏６・大型独尊立像塼仏５・光背塼６・塑像14（頭部・衣部・右脚部・蓮華座 11・塑像小片）	8 世紀
大谷瀬出土	茨城県結城市	銅造菩薩立像	8 世紀
神向寺	茨城県鹿嶋市	銅造如来坐像（鍍金）・銅造菩薩立像	9 世紀後半
鹿島神宮寺	茨城県鹿嶋市	銅造地蔵菩薩立像	12 世紀
熊の山遺跡３	茨城県つくば市	銅造毘沙門天	12 世紀
薬王院	茨城県真壁郡真壁町	銅造菩薩立像２	12 世紀
横塚阿弥陀堂（伝世）	茨城県真壁郡協和町	銅造如来坐像	12 世紀
薬師寺	茨城県西茨城郡常北町	銅造薬師如来座像	平安時代
徳蔵寺（伝世）	茨城県西茨城郡七会村	銅造観音菩薩立像	平安時代
光福寺	茨城県鹿島郡大洋村	銅造薬師如来立像	平安時代
深谷出土	茨城県新治郡霞ケ浦町	銅造天部立像	平安時代
神宮寺	茨城県新治郡霞ケ浦町	銅造千手観音菩薩立像	平安時代
島津出土	茨城県稲敷郡阿見町	銅造菩薩立像	平安時代
下り松遺跡	茨城県結城市	銅造観音菩薩立像・銅造地蔵菩薩立像	平安時代
本田屋敷遺跡	茨城県結城郡千代川村	銅造観音菩薩立像	平安時代
上大野観音田出土	茨城県猿島郡総和町	十一面観音立像	平安時代
峰崎遺跡	茨城県結城市	塑像（螺髪）	詳細不明

図６　仏像関係一覧表（千葉県・茨城県）
（池田・中村 2000 より転載　なお、市町村名は、2000 年時点の名称である。）

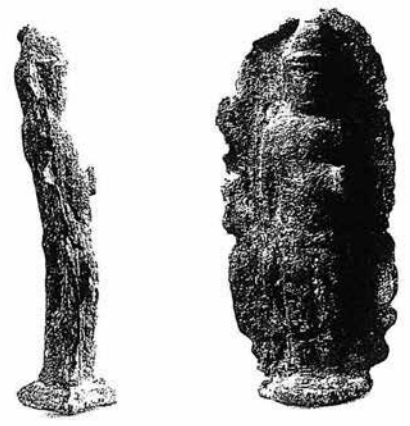


図８　名木廃寺表面採集菩薩立像
（常福寺所蔵、埼玉県立歴史と民俗の博物館画像提供）

図７　関峯崎３号横穴出土金銅製三尊押出仏
（香取市教育委員会所蔵）

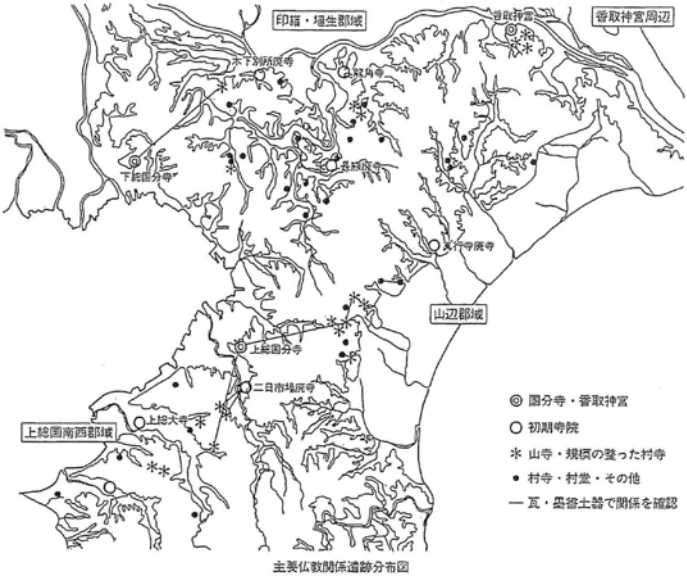


図９　主要仏教関係遺跡分布図（笹生 2006 より転載）

また、「菩薩立像、名木廃寺表面採集」（図８）は、成田市立下総歴史民俗資料館に常設展示されている小仏像です。仏像様式から七～八世紀頃のもので間違いないようです。印西市の木下別所廃寺でも小仏像が表面採集されて個人所蔵になっています。一九九三年に埼玉県立博物館が開催した特別展『甦る光彩　関東の出土金銅仏』で公にされました。この界隈は探すとまだ事例が増える可能性があります。情報をお持ちの方は市史編さん事業にご協力頂ければ幸いです。

瓦でも、小仏像と似た現象が起きています。下総龍角寺の軒丸瓦文様と同じ系統の軒先文様を採用した古代寺院が「香取・印旛の内海」に分布しています。

仏堂施設や、仏教系遺物でも同様です。「主要仏教関係遺跡分布図」（図９）は、國學院大學神道文化学部神道文化学科の笹生衛先生が今から二〇年ほど前に作成した図面を使用させて頂いています。印旛・埴生郡域＝印旛の内海沿岸にドットが目立ちます。

さらに人面土器や、「竈神」と書かれた墨書土器、「国玉神奉」と書かれた墨書土器などの存在から、おまじないや、神様祀りが盛んな様子がうかがえます。このような土器は、民間道教（巫術）の、まじない土器です。この手合いの遺物が印旛・香取地域は目立ちます。

国立歴史民俗博物館名誉教授平川南先生の著書（平川二〇〇〇）によれば、「古代の印旛から香取地域にかけては、村落祭祀の実態を端的に物語る文章化した墨書土器が出土し、その墨書土器は他の遺跡の一ないし二文字の墨書土器の意味をも解明できる貴重な資料である。（略）一定の祭祀や儀礼行為等のさいに土器になかば記号として意識された文字を記す、いいかえれば、祭祀形態に付随した形で一定の字形、なかば記号化した文字が記載されたのではないだろうか。」とのことです。

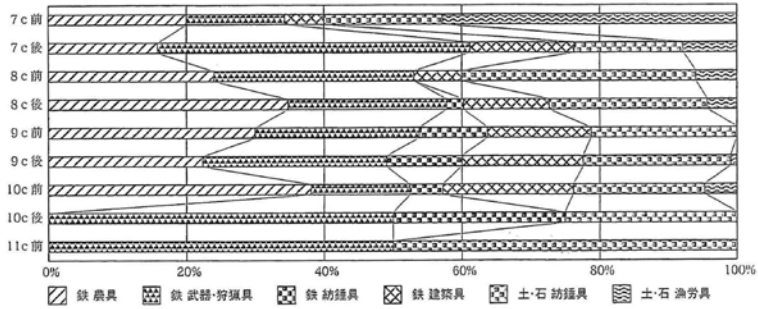
四　「印波・香取の内海」の生業～仏教史的考証

後半は話が、ガラッと変わります。

二〇一一年秋、日本考古学協会栃木大会というのがありました。その時、「古代社会の生業をめぐる諸問題」というシンポジウムを行いました。なお、各県の研究者と協力して、生業遺物の集計表を作成し、シンポジウム資料集にデータを掲載しました。千葉県のデータをみてみると「東総・山武地域」（図10）では丘陵地形のためか漁労具の土錘は合計四三点しか集計できませんでした。しかし、印旛地域は合計八一七点の出土が明らかになりました。なぜならば、印旛地域には「印旛・香取の内海」があったからです。今から約六〇〇〇年前は温暖化が進んだ時期で、縄文海進があ

東総・山武出土生業遺物点数表

	鉄製品											土・石製品			合計
	農具			武器・狩猟具			紡錘具	建築具				紡錘具		漁労具	
	鎌	手鎌	鋤鍬先	鏃	馬具	小札	紡錘車	釘	鉈	鎹	鐶	紡錘車(土)	紡錘車(石)	土錘	
7c前	4	3		5				2				2	4	15	35
7c後	18	6		69				23				7	17	12	152
8c前	16	8		29				6			1	9	25	6	100
8c後	38	16	2	37			4	19	1			8	29	7	161
9c前	55	16	1	57			24	32		4		11	40		240
9c後	39	7	1	56			23	35		2		16	29	2	210
10c前	6	2		3			1	3		1		3	1	1	21
10c後				2			1					1			4
11c前				2									2		4
合計	176	58	4	260	0	0	53	120	1	7	1	57	147	43	927



印旛出土生業遺物点数表

	鉄製品											土・石製品			合計
	農具			武器・狩猟具			紡錘具	建築具				紡錘具		漁労具	
	鎌	手鎌	鋤鍬先	鏃	馬具	小札	紡錘車	釘	鉈	鎹	鐶	紡錘車(土)	紡錘車(石)	土錘	
7c前	8			46			3	11				26	12	215	321
7c後	27	13	1	84			2	28	1	1		27	20	317	521
8c前	43	12	1	63			1	43		1	1	18	22	166	371
8c後	54	19	1	100			5	46	1			33	20	17	305
9c前	34	19	1	43			15	39	2			20	19	60	252
9c後	33	6	5	46			11	17		1		8	13	39	179
10c前	4	1	1	12			4	13	2			4	3		44
10c後	2	1		2			1	1				1	1	2	11
11c前	1			1			2							1	5
11c後			1												1
合計	206	71	11	397	0	0	44	198	6	3	1	137	119	817	2010

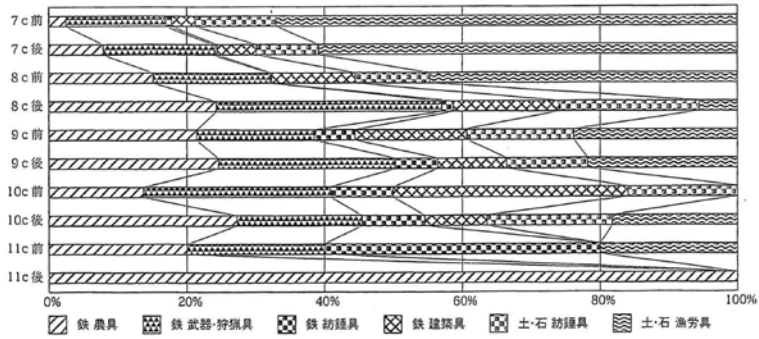


図 10　東総・山武出土生業遺物点数表、印旛出土生業遺物点数表
（松本 2011 より転載）

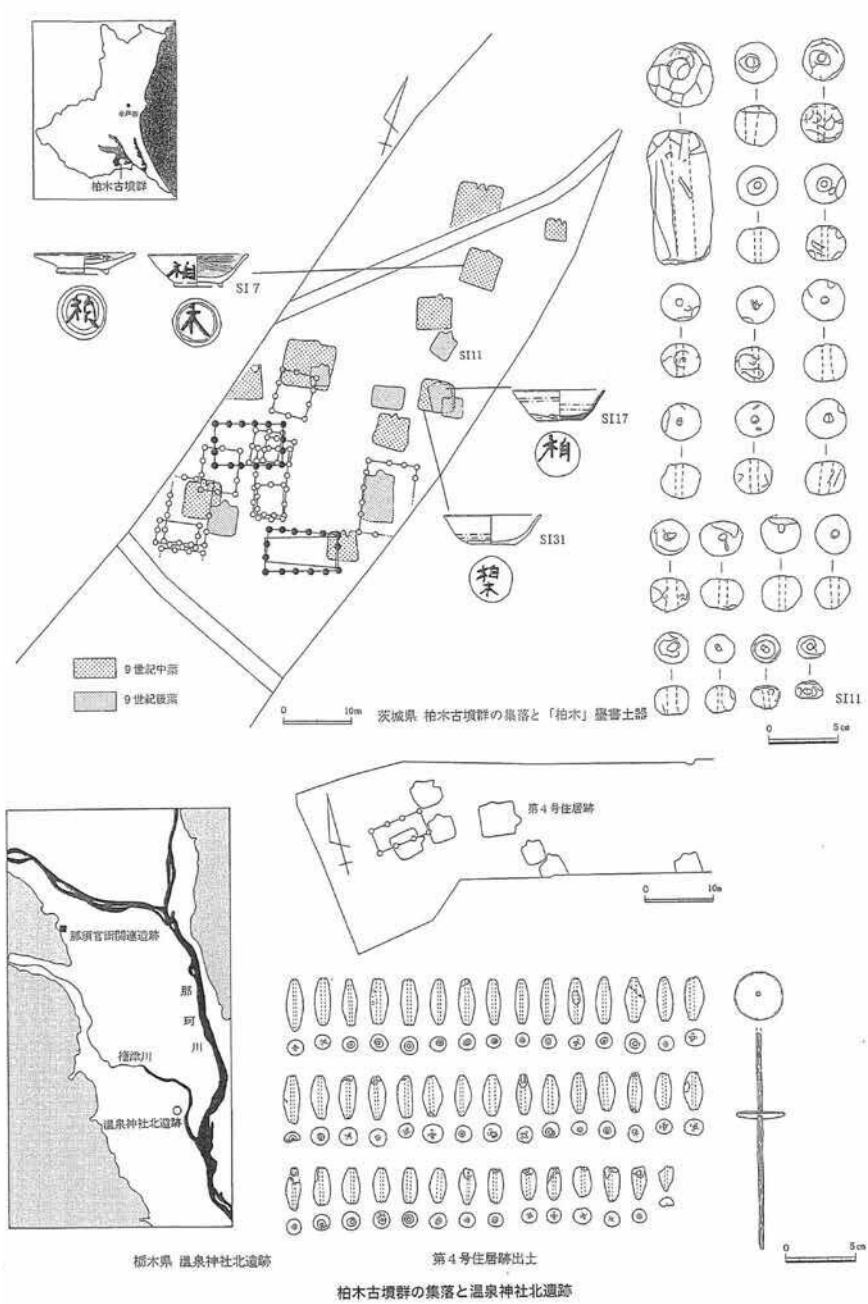


図 11　柏木古墳群の集落（土錘）（池田・津野 2011 より転載）

りました。海面は四メートルほど上昇したようです。鹿島・銚子・香取方面から海水が内陸に流れ込み、現在の印旛沼・手賀沼にかけて内湾（古鬼怒湾）を形成していました。この内海の状態は千三百年前でも変わらなかったようで「印旛浦」と呼ばれていました。印旛地域の土錘集計は、そうした古環境を反映した数値と言えましょう。

ちなみに、土錘とは、管の土製品で、太いものから小さいものもあります（図11）。太いものは、大型漁労（地引網のような大人数を必要とする漁労）の時に使われたのではないかと言われています。細いものは川魚漁に使われていたようです。網漁の時の重石だと言われています。茨城県稲敷市柏木古墳群の古代集落では、多量の大型管状土錘が出土しています。加えて、地名の「柏木」を記した墨書土器や、倉庫群が発見されています。そうした状況から、村をまとめる首（おびと）＝村長が住んでいた所ではないか。さらには、漁労具が出ていることから「柏木」ムラは漁村だったのではないかと分かるわけです。

同様に漁村と言っていいのが、先ほど話題にのぼった印旛地域です。石戸啓夫論文（二〇一三年）（図12）によれば、古代の遺跡から貝が出土し、食用されていたことが分かりました。しかも、鳴神山遺跡や、村上遺跡群、白幡前遺跡では、仏堂施設が営まれていたり、まじない土器や、瓦塔

図 12　印波における古代の貝の出土遺跡（石戸 2013 より転載）

が建立されている点が興味をひきます。

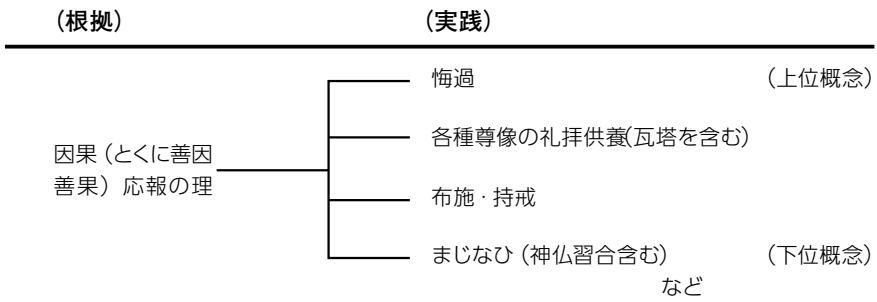
ところで、八世紀末～九世紀初頭頃に編さんされた『日本霊異記』には、生き物を殺生し「なりわい」とする人間が、因果応報（悪因悪果）の理によって報いを受ける（地獄に落ちるなど）説話が収録されています。他方、悪業をしていても仏様を信仰していたために救われたという話も『日本霊異記』に記されています（善因善果）。

仏教の戒律には、いろいろ決まりごとがあります。古代の中国や日本は大乗仏教を採用していますが、大乗仏教経典の『楞伽経』や『大般涅槃経』、それを奉じる仏教集団（とくに禅宗系統）の一派では、「なまぐさもの」を食べることは戒律に背く行為とされました。それが徐々に拡大解釈されて、「なまぐさもの」を扱う人々＝狩猟・漁労民は「悪業の身」だという考えが広まっていきました。

一方、仏教は、国王、貴族、民衆、賤民、身分の隔てなく生きとし生ける者の苦しみを救済・成道へ向かわせることを目的としています。その原点に立ち返ろうという動きがありました。代表的な人物は行基です。行基は、大乗菩薩道（自らも他人も救い救われることを願い、実践）に励んだ、お坊さんでした。

当時の人々からは「行基菩薩」と讃えられていましたが、民衆を相手に「おまじない」も行ってもいました。そこで

【仮説 1】



【仮説２】

霞ヶ浦～「印波･香取の内海」世界を求道の場とし、衆生を教化した菩薩道実践者（僧侶、ないし有徳の優婆塞・優婆夷）の存在を推定出来るのではなかろうか

…常陸・鹿島神宮寺［天平勝宝年中開基と云う］、下総・香取神宮寺［鹿島神宮寺と同時期に開基と云う］などを開基した満願（または万巻、萬巻）上人の伝承や、空海が密教経典の写経協力を依頼した「万徳菩薩」宛て書簡(『高野雑筆集』所収）を再検証していくうえで興味深い事象と私は思っている(今後の課題としたい)。

図 13　仮説 1・仮説 2（池田作成）

行基の大乗菩薩道を参考に、「悪業の身」をいかに救済するかを考えてみました。その折、救済方法にも、いろいろと階層があるのではないだろうかという仮説を立てました（図13）。

仏教であれ、神道であれ、キリスト教であれ、世界のすべての宗教に共通して言えるのは、マジカル要素を取り込んだ上で、いかに昇華し、上位の思考（教理）に持っていくかが肝要です。それを上手に実践しているのが、普遍宗教と言われる仏教です。なので、仏教遺跡で、まじない土器が出ても不思議ではありません。むしろ、「このような礼拝供養の方法があるから、それに基づいた「おまじない」や、仏教作法をすると、より功徳が高まる」と指導的立場の僧侶は説くことでしょう。加えて、僧侶と信者を仲介する有徳の優婆塞・優婆夷の力量によっても変わってくると思います。

先ほど聖地の話をしましたが、鹿島、香取は神様祀りが盛んです。『縁起書』によれば、両地に神宮（寺）を開いたのは満願上人という、お坊さんです。しかも神仏習合は、「おまじない」に詳しい密教系のお坊さんが関わっているという意見があります。満願上人も、そうしたお坊さんだった可能性が高いと私は思っています。

あともう一人、私が注目している、お坊さんがいます。「万徳菩薩」と讃えられた、お坊さんです。『高野雑筆集』という空海の手紙を集めた書簡集の中に、弘仁六（八一五）年春、空海が万徳菩薩に宛てた書簡が収録されています。「如来の悲願は類に随って生を摂し、菩薩の応現は所として有らずといふことなし。聞くが如くむば、万徳菩薩は迹を東方に垂れ、法を崇め生を化すと。之を聞き、之を聴いて」云々とあります。万徳菩薩という方が東国の地に来て、仏教を広めると同時に「生を化す」＝民間布教をしているということです。万徳というお坊さんが先ほどの満願と関係があったら面白いです。それがどうなっていくかということは、これから先の研究課題です。

ちなみに、従来の研究では、万徳菩薩がどこを拠点としていたかは不明扱いされてきました。しかし、今回扱ったように仏教系遺物・まじない系遺物が多い印旛・香取地域を、一つの候補地として挙げてみてもいいのではないかと思っています。また逆に万徳菩薩の拠点が印旛・香取地域でなくても、仏教教学を知り、なおかつ、「おまじない」的なことを統合できる布教者がこの界隈にいたと思われます。

最後に、「九世紀における関東地方仏教系遺物出土傾向モデル」（図14）をご覧下さい。まじない土器と墨書土器の分布は東関東に多く、西関東には少ない傾向を示しています。一方、西関東は瓦塔が多く、西関東の瓦塔信仰が「印旛・

香取の内海」世界に波及した可能性が極めて高いと考えています（西関東で、瓦塔信仰がなぜ盛んなのかを考えていくのが、私のこれからの大テーマでもあります）。

私の話は以上です。ご清聴ありがとうございました。

付記　本稿は、令和四（二〇二二）年十二月三日に開催された印西市史編さん講演会の内容を活字化したものである。活字化にあたり、池田氏の校正のもと、一部の内容を修正した。また参考文献や先行研究は主要なもののみを掲載した。

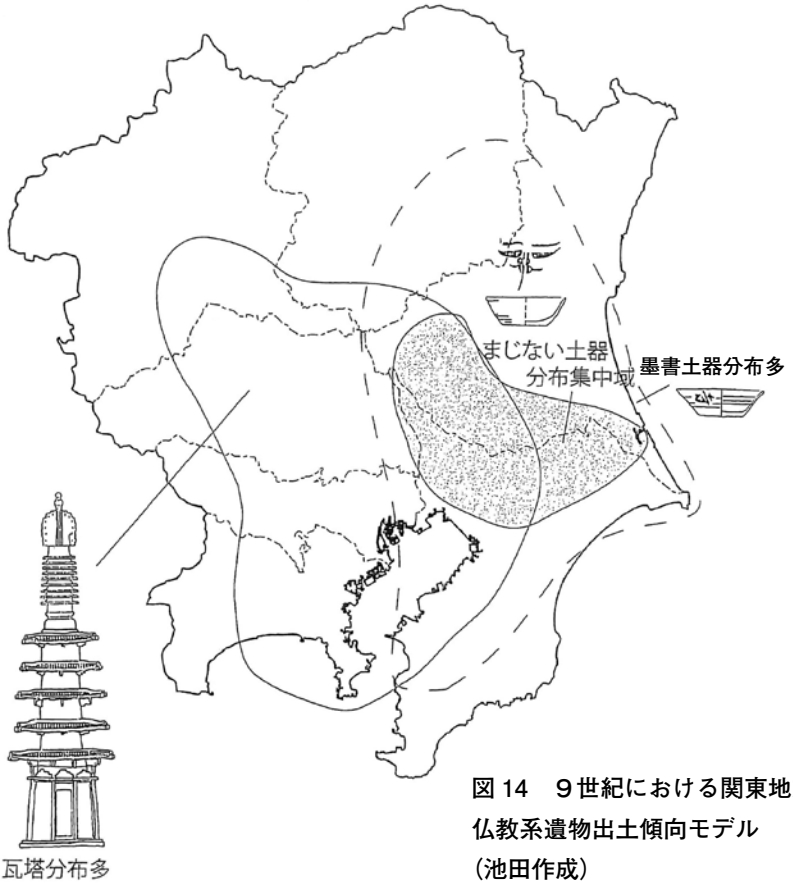


図 14　９世紀における関東地方仏教系遺物出土傾向モデル（池田作成）

講演会の様子

（註）

1　単一堂宇寺院は、単独で堂しかない寺。瓦葺きの場合もある。立正大学名誉教授の坂詰秀一は「単一堂宇寺院」と名付け、筆者もこの用語を使用している。

引用文献・参考文献

池田敏宏「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討―関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に―」（『研究紀要』第七号、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター、一九九九年）五七～一〇四頁。

池田敏宏「山野開発と瓦塔の造立―瓦塔造立の背景についての考察―」（『開発と神仏とのかかわり』古代考古学フォーラム古代の社会と環境：資料集、帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会、二〇〇四年）。

池田敏宏「瓦塔初重空間の利用法―八～九世紀における造塔意識の変化に関する考察―」（『研究紀要』第一三号、とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、二〇〇五年）四一～六四頁。

池田敏宏「第七集　古代　第三節　遺物の研究　四．信仰関係の遺構と遺物」（『研究紀要』第一五号、とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、二〇〇七年）。

池田敏宏「古代在地仏教研究へ向けての序―造塔意識の変化を中心に―」（『地域考古学』第三号、地域考古学研究会、二〇一八年）

一四三～一五二頁。
池田敏宏「続・古代在地仏教研究へ向けての序―造塔意識の変化を中心に」（『地域考古学』第四号、地域考古学研究会、二〇一九年）。
池田敏宏・津野仁「関東地方の古代生業」（『研究発表資料集：一般社団法人日本考古学協会二〇一一年度栃木大会』日本考古学協会二〇一一年度栃木大会実行委員会、二〇一一年）。
池田敏宏・中村絵美「仏像・経塚」『古代仏教系遺物集成・関東：考古学の新たなる開拓をめざして』（考古学資料から古代を考える会、二〇〇〇年）。
石戸啓夫「古代印波の水環境と集落形成―印西における古代集落形成の分析から―」（『印西の歴史』第七号、印西市史編さん委員会・印西市教育委員会、二〇一三年）二八～五四頁。
市村高男監修／茨城県立歴史館編『中世東国の内海世界―霞ケ浦・筑波山・利根川―』（高志書院、二〇〇七年）。
印旛沼環境基金『印旛沼のはなし』（二〇二一年）。
上高津貝塚ふるさと歴史の広場『第三回特別展　仏のすまう空間―古代霞ケ浦の仏教信仰―』（一九九八年）
弘法大師空海全集編輯委員会「高野雑筆集」（『弘法大師空海全集』第七巻、筑摩書房、一九八四年）。
埼玉県立博物館『甦る光彩―関東の出土金銅仏―』（一九九三年）。
埼玉県立歴史資料館『資料館ガイドブック一一　埼玉の瓦塔』（一九九四年）。
笹生衛「古代東国集落と仏教信仰―千葉県内の事例を中心に―」（『在地社会と仏教』記録集、独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所、二〇〇六年）。
大正大学仏教学科編『仏教とはなにか―その思想を検証する―』（大法輪閣、一九九九年）。
中田祝夫（全訳注）『日本霊異記』（上・中・下、講談社学術文庫、一九七八・一九七九・一九八〇年）。
平川南『墨書土器の研究』（吉川弘文館、二〇〇〇年）。
北條勝貴「〈神仏習合〉言説の日本的展開―自然環境・祟り神・神身離脱―」（『古代の社会と環境　考古学からみた古代の環境問題―天災は人災か―』古代考古学フォーラム古代の社会と環境：資料集、帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会、二〇〇三年）。
松本太郎「千葉県の古代生業」『研究発表資料集：一般社団法人日本考古学協会二〇一一年度栃木大会』（二〇一一年）。
吉田靖雄『日本古代の菩薩と民衆』（吉川弘文館、一九八八年）。

刊行物のご案内

【印西市史（印西町史・印旛村史・本埜村史）】

書　籍　名	価格（円）	刊行年	内　　容
印西市史 資料編 近現代２	5,000	2019	終戦から平成 22 年 3 月の新印西市誕生までの資料 175 点を掲載
印西市史 資料編 近現代１	5,000	2021	明治から終戦までの資料 438 点を掲載
印西市歴史読本 原始・古代編	1,300	2011	印西地区の原始・古代の歴史読み物
印西市歴史読本 中世・近世編	1,300	2011	印西地区の中世・近世の歴史読み物
印西市歴史読本 近代・現代編	1,300	2011	印西地区の近代・現代の歴史読み物
印西町史 史料集 近世編１	売り切れ	1986	木下河岸関係文書
印西町史 史料集 近世編２	4,000	1987	木下河岸関係文書
印西町史 史料集 近世編３	5,000	1992	土地・村況・戸口・貢租
印西町史 史料集 近世編４	5,000	1993	支配・開発・諸産業と流通・寺社・宗教等
印西町史 史料集 文化遺産編	5,000	1992	寺社・堂宇
印西町史　民俗編	5,000	1996	印西地区の民俗
印旛村史　通史Ⅰ	6,800	1984	原始・古代・中世・近世
印旛村史　通史Ⅱ	7,000	1990	近代（～昭和 30 年）、民俗
印旛村史 近世編 史料集Ⅰ	5,800	1982	支配・貢租
印旛村史 近世編 史料集Ⅱ	5,000	1978	土地、村政・村況、戸口・身分
印旛村史 近世編 史料集Ⅲ	5,000	1980	農業、漁業･鳥猟、林野、商業･金融、水利･普請、諸産業、交通、寺社・宗教、家、教育・文化、日記、地誌
印旛村史 近代編 史料集Ⅰ	7,000	1986	行政、議会、財政・租税
印旛村史 近代編 史料集Ⅱ	7,000	1988	土地、産業、治水、交通、厚生、兵事･治安、教育、宗教･文化、民俗、補遺
本埜の歴史	1,400	2008	歴史読み物
本埜村史 史料集 近世編１	売り切れ	1977	中根村関係文書
本埜村史 史料集 近世編２	売り切れ	1978	埜原新田関係文書
本埜村史 史料集 近世編３	2,500	1979	龍腹寺村関係文書
本埜村史 史料集 近世編４	2,500	1983	物木・笠神・滝・荒野村関係文書
本埜村史 史料集 近・現代編	5,000	1985	政治、産業経済、社会・文化

【市史研究誌（町史研究誌）】

書　籍　名	価格（円）	刊行年	内　　容
印西町の歴史 創刊号	700	1985	・編さん委員から ・印西台地の地質 ・中世史解明の方策について ・農作業の移り変わり ・先土器時代の印西町 ・庚申信仰と北総の百庚申 ・郷土史の手がかりを求めて ・印西小林村光明寺かいわい
印西町の歴史 第２号	800	1986	・金石文が語る女人信仰 ・雑誌『創作』と『赤い鳥』 ・神々とともに消えた庚申山 ・河村家文書「庚申待縁記」の謎 ・木下河岸と鮮魚街道 ・成田線よもやま話
印西町の歴史 第３号	900	1987	・縄文時代の印西町（一） ・木下河岸と鮮魚街道（二） ・消えゆく掩体壕 ・印西町の不二道孝心講 ・利根川水運と木下河岸の研究をめぐって（一） ・古道「常陸路」の探索 ・印西町の十九夜塔と子安塔 ・亀成の水害
印西町の歴史 第４号	900	1988	・聞き書き雑煮 ・近世地方文芸への接近 ・疱瘡と民俗 ・花見堂地蔵尊 ・再び河村家文書「庚申待縁記」の謎について ・天神台遺跡の概要 ・利根川流域の校歌について ・木下街道（行徳みち） ・木下河岸と鮮魚街道 (三)
印西町の歴史 第５号	売り切れ	1989	・鳳谷五郎小伝 ・近代美術工芸界の父　香取秀真の生涯 ・国境（くにざかい）としての利根川 ・縄文時代の印西町（前期） ・木下音頭 ・木下河岸の人々のくらし（前編） ・印西町周辺貝化石岩使用古墳について ・佐倉領結縁寺村について ・先土器時代の構造研究について ・佐藤春夫と子母沢寛
印西町の歴史 第６号	900	1990	・古代、中世史の課題 ・印旛地方における地域教育展開の一齣 ・印西町の文化財 ・村のあゆみ ・小林城址とその地名 ・近世の別所村 ・薪俵河岸 ・木下河岸の人々のくらし（後編） ・六軒河岸のこと ・仙助河岸 ・松山下地区採集の化石について
印西町の歴史 第７号	900	1991	・鐘はかくして ・流れ潅頂と女人成仏 ・印西交通史一瞥 ・巴伝承と小林 ・国史編纂略史 ・「仁」に徹した教育 ・草深の歴史（一） ・移りゆく生活と風物 ・近世の平岡村
印西町の歴史 第８号	900	1992	・わが国算数教育の革新者 ・草深の歴史（二） ・手賀沼ー『手賀沼沿革史』を中心としてー ・草深の牡鹿ー地方文芸の味わいー ・総州六阿弥陀詣 ・千葉県教育界の偉材
印西町の歴史 第９号	900	1993	・利根川漁猟物語 ・草深の歴史（三） ・旧事談に想う ・柳澤千貫（ちぬき）先生 ・不世出の秀才　鈴木廸彦先生 ・松尾芭蕉研究

書　籍　名	価格（円）	刊行年	内　　容
印西町の歴史 第 10 号	900	1994	・資料紹介　松山一号墳出土の遺物 ・安政元年のタイムカプセル　・印西町の奥州講 ・大森陣屋発砲一件と淀藩下総領の農兵について ・水野葉舟先生
印西町の歴史 第 11 号	900	1995	・印西の考古文献　・梶沼勝之助先生を偲ぶ ・小林新田（堤内外）の歴史　・印西町の咳神信仰とその伝承 ・明治初期にみられる印西町の正教会 ・佐倉藩領内に祀られている社日塔と祭り ・近世・近現代古文書悉皆調査概報
印西町の歴史 第 12 号	900	1996	・印西と短歌のかかわり（その一）・泉倉寺、結縁寺、光堂 ・天神台遺跡と周辺遺跡について・泉倉寺の五重相伝と常念仏 ・印西町のくら　・幸町のこと
印西の歴史 創刊号	1,000	1998	・発刊の言葉　・創刊にあたって ・香取秀眞の足跡を訪ねて ・蒸気船からみる木下の明治（その一） ・木下街道（行徳みち）　・道作１号墳の調査について ・西根遺跡の採集資料について－低地遺跡の発見－ ・印西町の歴史　創刊号～第十二号総目次
印西の歴史 第２号	1,000	1999	・印西市の長屋門 ・恵心流五重念仏相伝資料について ・印西市の念仏信仰と泉倉寺 ・「木下河岸」の図から見た明治の木下 ・寸松軒吟奈『鹿島之紀行』 ・画工貝華堂芳斎の追跡
印西の歴史 第３号	1,000	2001	・蒸気船からみる木下の明治（その２） ・手賀沼の生物と水環境と漁業を中心とした変遷 ・昭和の水害　・草深野鹿の碑－「評」のことども－ ・印西市の湯殿山信仰
印西の歴史 第４号	700	2008	・淀藩下総領別所村の年貢 ・印西市・西福寺の賢光作　不動明王立像及び毘沙門天立像について ・《速報》発見！古代の郷（村）の管理施設－印西市船尾白幡Ⅱ遺跡から古代を探る－ ・銚子汽船会社木下支店の旗 ・大利根を快走する外輪蒸気船 ・－木下まち育て塾－企画展「Kioroshi（木下）蒸気船銚港丸」顛末私記 ・小林幸太郎の業績と生涯１- 印西大地が生んだ異能の人 - ・地域の捉え方と学習姿勢 - 昭和初期の教育雑誌に学ぶ -
印西の歴史 第５号	550	2010	・印西の水塚 ・水戸藩国産鮮荷物の継送をめぐる抗争－安食村文内について－ ・歩兵第二連隊将兵の宿泊にみる木下の旅館 ・高橋良助氏収集資料の石器～旧石器・縄文時代の剥片石器など～ ・千葉県印西市の更新統下総層群「木下貝層」模式地の貝化石群 ・「木下街道膝栗毛二〇〇九」を終えて ・印西市の植物
印西の歴史 第６号	500	2012	・印西市馬場遺跡第 5 地点 241 号土坑について ・馬場遺跡出土の貝輪について ・戸ノ内貝塚発掘調査報告書 ・小金印西牧の開発と野馬土手 ・天明期・印旛沼開発と惣深新田村の平左衛門信賢 ・下総に埋れた最上徳内の孫・平松基の生涯

書　籍　名	価格（円）	刊行年	内　　容
印西の歴史 第７号	700	2013	･平成二十三年度市史編さん講演会講演録「江戸時代の印旛沼」 ・縄文時代の印西地域の水域復元 ・古代印波の水環境と集落形成ー印西における古代集落形成の分析からー ・天明期印旛沼掘割普請後の下利根川流域の動向 ・近代の手賀沼ー洪水と治水の歴史ー ・明治十年代、初期銚港丸三船の建造及びその経営実態について ・印西の女神たちー宗像神社・厳島神社・水神宮ー
印西の歴史 第８号	430	2015	・千葉妙見社から見る千葉氏と原氏～戦国期を中心に～ ・北総産須恵器の再検討 ・印西市域の庚申塔と十九夜塔および子安塔について ・阿夫利神社祭礼の神輿渡御と梯子立て神事 ・武藤家文書の『房総新聞』にみる印西市域 ・近現代部会の活動
印西の歴史 第９号	400	2016	・古代印旛郡における東京湾産貝類の利用について ・「山本源次郎の農民運動をきく」（一九五〇・二・一八　木下） ・時代の証言者　吉岡敏夫氏
印西の歴史 第 10 号	500	2017	・木下河岸問屋吉岡家と佐原の伊能忠敬―近世の地域間交流と河岸場運営の変容― ・印西市域の中世城館跡研究の現状と課題 ・明治期に行われた薬剤小売業の一例―愛生舘第一支部雷鳴堂と岩井常蔵― ・下総自動車について
印西の歴史 第 11 号	450	2018	・地域の共助と仏教者による感化救済事業―六合村慈善会の活動を中心に― ・明治前期の木下街道 ・山根山不動尊奉納句額と画師・豊岡東江について ・平成 29 年度市史編さん講演会 残された史料から見る地域社会における伝染病予防対策
印西の歴史 第 12 号	550	2020	・令和元年度市史編さん講座（全５回） 「町や村が消えた―印西市域の町村合併―」「地域の産業と千葉ニュータウン」「大菅喜一と手賀沼干拓事業」「あの日学校で見た映画―「映画日誌」にみる娯楽と啓蒙―」「印西市域のくらし―終戦から新しい印西市の誕生まで―」 ・印西の中世石塔をさぐる ・近世絵図から見る発掘調査成果ー印西市高堀遺跡の事例からー ・印西大師は享保六年に創設された ・慶応二年の打擲一件をめぐる淀藩大森陣屋役人の対応 ・富井宗之助について ・高浜（茨城県）・木下間を航行した第四通運丸等の賃銭表に係る一考察 ・房総と浮世絵ー風景錦絵を中心にー
印西の歴史 第 13 号	500	2022	・埴生西条・印西条・印西庄の成立と変遷 ・安政江戸地震の被害記述の科学的検証 ～印西市・成田市・佐倉市での地震観測を通して～ ・民権家・鈴木政吉について ・宝田吉朗日誌にみる明治初年代の木下 ー木下街道を通行した鹿島香取両神宮への奉弊使ー ・明治期の博覧会資料にみる印西地域の林業と「佐倉炭」

【その他】

書　籍　名	価格（円）	刊行年	内　　容
木下貝層（第５版）	500	2019	国天然記念物「木下貝層」の貝化石ガイドブック
新・印西名所図会	1,000	2016	市の歴史資料、文化財、民俗のガイドブック
ふるさと歴史アルバム いんざい	800	2002	印西地区の明治から昭和にかけての古写真集
改訂版初学者のための近世文書解読の手引	売り切れ	1995	古文書学習の手引書
印西市の仏像（印西地域編）	1,000	2014	印西地区の仏像調査報告書
印西市の仏像（本埜地域編）	800	2018	本埜地区の仏像調査報告書
光堂の竜	売り切れ	1992	印西地区の民話集
そうふけっぱらのきつね	1,200	1992	民話の絵本
印西町の板碑 －印西町石造物第１集－	売り切れ	1979	印西地区の板碑
小林地区調査報告書 －印西町石造物第２集－	1,000	1981	印西地区小林の石造物
草深地区調査報告書 －印西町石造物第３集－	1,000	1983	印西地区草深の石造物
草深地区の特色ある石造物 －印西町石造物第４集－	500	1984	印西地区草深の石造物のうち特色のある石造物
船穂地区調査報告書 －印西町石造物第５集－	1,000	1987	印西地区船穂の石造物
永治地区調査報告書 －印西町石造物第６集－	1,000	1989	印西地区永治の石造物
大森地区調査報告書 －印西町石造物第７集－	1,000	1990	印西地区大森の石造物
木下地区調査報告書 －印西町石造物第８集－	1,000	1991	印西地区木下の石造物
印西町石造物調査報告書　追録	500	1995	追録
石との語らい	売り切れ	1992	石造物総集編
印西市立印旛歴史民俗資料館研究紀要創刊号	売り切れ	2019	古井戸原２号墳出土埴輪基礎調査報告書
印西市立印旛歴史民俗資料館研究紀要第２号	400	2020	古井戸原古墳群の発掘調査記録ほか
印西市立印旛歴史民俗資料館研究紀要第３号	400	2021	大木台２号墳　形象埴輪配置の再検討ほか
印西市立印旛歴史民俗資料館研究紀要第４号	600	2022	西ノ原１号墳出土埴輪基礎調査報告書

◆ 頒布場所
木下交流の杜歴史資料センター・中央公民館・小林公民館・そうふけ公民館・印旛公民館・本埜公民館
中央駅前地域交流館・印旛歴史民俗資料館・生涯学習課文化係
＊小林公民館は保全改修工事による休館のため、令和５年９月30日（土）まで頒布中止
＊郵送を希望される場合は代金・送料 (切手) を現金書留で、木下交流の杜歴史資料センター まで送付してください。（郵便小為替でも可、送料は切手でお願いします。）
複数冊購入される場合とゆうパック扱いの送料はお問い合わせください。
◆ 問合せ先
印西市立木下交流の杜歴史資料センター（月曜・祝日休館）　TEL　0476（40）3500
〒270-1326　千葉県印西市木下 1489 番地 1

〔編集後記〕

○　市域には旧石器から近世まで数多くの遺跡が所在しています。今号では「印西地域の原始・古代」と題した特集を組み、弥生時代を専門とする市史編さん委員のほか、千葉県内で原始・古代を調査・研究されている方々の成果を掲載しました。ご多忙の中、原稿をお寄せいただいた執筆者と、調査にご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。

○　橋本勝雄氏には、令和元年度に行われた市内松崎に所在する東海道遺跡の発掘調査で出土した超大型ナイフ形石器について、詳細な資料紹介に加え、周辺地域の出土事例をもとに、資料の意義をまとめた論考をいただきました。

○　高花宏行印西市史編さん委員には、弥生時代の土器型式について、印旛沼周辺地域の遺跡から出土した土器と、市内造谷・荒野に所在する向辺田遺跡から出土した土器の分析を行い、新たな土器型式を論じていただきました。

○　池田敏宏氏を講師に迎え、令和四年十二月三日に文化ホールで開催した市史編さん講演会「瓦塔から探る古代・印旛郡の仏教文化」の講演録を掲載しました。当日は四九名に参加いただき、盛況のうちに終えることができました。瓦塔の概要とともに、漁労具を中心とした生業遺物と古代印旛郡の水域を重ね合わせたことで、民衆仏教と瓦塔信仰の広まりの可能性を示唆した内容となっています。

○　巻末には、刊行物一覧を掲載しました。ご興味がございましたら、左記までご連絡ください。

○　『印西の歴史』では投稿原稿も受け付けております。奮ってご寄稿ください。

○　令和三年度より印西市史第二次刊行計画が始まり、市史編さん専門委員の方々による資料調査などが着々と進められております。現在、『印西市史』初の通史編刊行にむけて鋭意作業中です。また、調査や編さん作業には市民の皆様をはじめとした多くの方々のご協力が必要です。地域の歴史を明らかにする古文書のほか、市内店舗等のチラシやポスター、写真、昔のことに関する言い伝えなどの情報を木下交流の杜歴史資料センターまでお知らせください。何卒よろしくお願いいたします。

連絡先

印西市立木下交流の杜歴史資料センター

電話〇四七六―四〇―三五〇〇

（事務局）

印西の歴史　第一四号

発行日　令和五年三月三十一日
編　集　印西市史編さん委員会
　　委員長　木村　修
発　行　印西市立木下交流の杜歴史資料センター
　　〒二七〇－一三二六
　　千葉県印西市木下一四八九番地一
　　電話　〇四七六－四〇－三五〇〇
印　刷　株式会社　総合印刷新報社